

# 四ツ壇遺跡ほか



四ツ壇遺跡2号住居跡

平成18年3月

宮城県栗原市教育委員会



四ツ壇遺跡ほか



## 序 文

本書は栗原市瀬峰地区に位置する四ツ壇遺跡、寺浦遺跡、四ツ塚遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

これらの発掘調査はいずれも個人の方々の依頼により旧瀬峰瀬峰町教育委員会が主体となり、発掘調査を実施したものです。詳細は本書の内容に譲りますが縄文時代、古墳時代、古代の遺構や遺物を確認することができました。いずれも小規模な調査ですが、継続して実施していくことで重要な発見ができるものと考えております。ところで、栗原市のはとんどの地域は古代においては栗原郡と考えられていますが、瀬峰地区は新田郡の一部、高清水地区は長岡郡の一部という研究があります。今後の発掘調査や研究を通して各地域の状況を確認し比較することで栗原市内の類似点と相違点を明らかにしていくことは大変重要なことと考えています。

さて、栗原市が誕生してまもなく1年が過ぎようとしています。古代においてはいくつかの地域にわかれていましたが、その後で江戸時代には栗原郡となり、さらに本年度栗原市となりました。それぞれの地区はそれぞれかかわりあいながらも独自の歴史、伝統を造り上げてきました。このことを端的に把握できるものの1つが文化財と考えています。文化財の保護にかかわることで過去を考え、未来を考えることができるものと考えています。今後も文化財の保護にご協力いただきますようお願い申し上げます。

最後に調査を進めるにあたり、ご指導、ご協力をいただきました宮城県教育庁文化財保護課の皆様、実際調査に参加された作業員の皆様、そして種々ご協力をいただきました皆様に感謝申し上げ発刊のあいさつといたします。

平成18年3月

栗原市教育委員会

教育長 佐藤光平

## 目 次

序 文	
目 次	
例 言	
I. 遺跡の位置と歴史的・地理的環境	1
II. 四ツ塚遺跡	5
III. 寺舗遺跡	30
IV. 四ツ塚遺跡	41

## 図 目 次

第1図 栗原市の位置	第19図 古墳時代中期の遺物
第2図 四ツ塚遺跡ほかの位置と周辺の遺跡	第20図 1号住居跡模式図
第3図 四ツ塚遺跡と調査区の位置	第21図 寺舗遺跡と調査区の位置
第4図 遺構配置図	第22図 遺構配置図
第5図 1号住居跡	第23図 1号住居跡出土遺物
第6図 2号住居跡	第24図 1号住居跡
第7図 2号住居跡出土遺物（1）	第25図 2号建物跡模式図
第8図 2号住居跡出土遺物（2）	第26図 3号建物跡模式図
第9図 5号住居跡	第27図 4号建物跡模式図
第10図 5号住居跡出土遺物（1）	第28図 5号建物跡模式図
第11図 5号住居跡出土遺物（2）	第29図 2～5号建物跡と出土遺物
第12図 5号住居跡出土遺物（3）	第30図 II期の遺構配置図
第13図 3号土坑	第31図 四ツ塚遺跡と調査区の位置
第14図 4号土坑	第32図 遺構配置図
第15図 6号土坑と出土遺物	第33図 土 坑
第16図 8号土坑	第34図 『瀬峰町史』所載の四ツ塚
第17図 基本層序出土遺物	第35図 1・2号塚
第18図 住居跡出土遺物	

## 表 目 次

第1表 柱穴の規模	第8表 柱穴の規模
第2表 土坑の規模	第9表 柱穴の規模
第3表 焼け面	第10表 柱穴の規模
第4表 2号住居跡出土遺物（1）観察表	第11表 柱穴の規模
第5表 5号住居跡土層記	第12表 遺構の重複関係
第6表 柱穴の規模	第13表 塚の規模
第7表 遺構の重複関係	第14表 『瀬峰町史』所載の四ツ塚の規模

## 目 次

序 文	
目 次	
例 言	
I. 遺跡の位置と歴史的・地理的環境	1
II. 四ツ塚遺跡	5
III. 寺舗遺跡	30
IV. 四ツ塚遺跡	41

## 図 目 次

第1図 栗原市の位置	第19図 古墳時代中期の遺物
第2図 四ツ塚遺跡ほかの位置と周辺の遺跡	第20図 1号住居跡模式図
第3図 四ツ塚遺跡と調査区の位置	第21図 寺舗遺跡と調査区の位置
第4図 遺構配置図	第22図 遺構配置図
第5図 1号住居跡	第23図 1号住居跡出土遺物
第6図 2号住居跡	第24図 1号住居跡
第7図 2号住居跡出土遺物（1）	第25図 2号建物跡模式図
第8図 2号住居跡出土遺物（2）	第26図 3号建物跡模式図
第9図 5号住居跡	第27図 4号建物跡模式図
第10図 5号住居跡出土遺物（1）	第28図 5号建物跡模式図
第11図 5号住居跡出土遺物（2）	第29図 2～5号建物跡と出土遺物
第12図 5号住居跡出土遺物（3）	第30図 II期の遺構配置図
第13図 3号土坑	第31図 四ツ塚遺跡と調査区の位置
第14図 4号土坑	第32図 遺構配置図
第15図 6号土坑と出土遺物	第33図 土 坑
第16図 8号土坑	第34図 『瀬峰町史』所載の四ツ塚
第17図 基本層序出土遺物	第35図 1・2号塚
第18図 住居跡出土遺物	

## 表 目 次

第1表 柱穴の規模	第8表 柱穴の規模
第2表 土坑の規模	第9表 柱穴の規模
第3表 焼け面	第10表 柱穴の規模
第4表 2号住居跡出土遺物（1）観察表	第11表 柱穴の規模
第5表 5号住居跡土層記	第12表 遺構の重複関係
第6表 柱穴の規模	第13表 塚の規模
第7表 遺構の重複関係	第14表 『瀬峰町史』所載の四ツ塚の規模

## 図版目次

図版1	調査区近景（南東より） 1号住居跡（西より） 1号住居跡掘り方除去状況（西より）	図版6	2・3号建物跡（西より） 4号建物跡（南より） 5号建物跡（南より）
図版2	2号住居跡（南より） 2号住居跡カマド（南西より） 2号住居跡床面鉢輪車出土状況（西より）	図版7	寺浦遺跡出土遺物
図版3	5号住居跡（西より） 5号住居跡カマド（南西より） 5号住居跡炭化物層上面土師器出土状況（北西より）	図版8	調査前の四ツ塚（北より） 四ツ塚調査区（南西より） 1号塚断面（西より）
図版4	四ツ塚遺跡出土遺物	図版9	2号塚断面（西より） 3号土坑（北より） 4号土坑（北西より）
図版5	寺浦遺跡遠景（南東より） 調査区近景（南より） 1号住居跡（西より）		

## 例　　言

1. 本書は、各種民間事業にかかる四ツ塚遺跡、寺浦遺跡、四ツ塚遺跡の発掘調査報告である。

2. 調査要項は以下の通りである。

### 四ツ塚遺跡（宮城県遺跡登載番号：46004）

【調査原因】堆肥舎建設造成

【所在地】宮城県栗原郡瀬峰町大里字中諏訪原66~69

【調査面積】600m<sup>2</sup>

【調査期間】平成15年12月23日、25日～平成16年1月10日、1月27日

【調査主体者】瀬峰町教育委員会教育長 濱田利昭

【調査担当者】瀬峰町教育委員会社会教育課主任 安達訓仁

【調査指導】宮城県教育庁文化財保護課

【調査協力】宮城県農業公社、瀬峰町産業課、㈱佐々木貢建

【調査参加者】伊東 有一 小野寺敬典 佐藤 晃子 佐藤 貞夫 鈴木 茂 穴木 広美 高橋 崇行 千葉 栄子  
高橋壽夫 千葉 芳一 野村 文恵 千葉 良喜 佐々木孝行 高橋 和子

【整理参加者】穴木 広美 千葉 栄子 星宗久美子 労賀 雅子

### 寺浦遺跡（宮城県遺跡登載番号：46003）

【調査原因】堆肥舎建設造成

【所在地】宮城県栗原郡瀬峰町大里字寺富浦98~2

【調査面積】210m<sup>2</sup>

【調査期間】平成16年7月5日～15日

【調査主体者】瀬峰町教育委員会教育長 濱田利昭

【調査担当者】瀬峰町教育委員会社会教育課主任 安達訓仁

【調査指導】宮城県教育庁文化財保護課

【調査協力】佐々木道幸

【調査参加者】小野寺敬典 鈴木 茂 佐藤 貞夫 高橋 崇行 佐々木道幸

【整理参加者】星宗久美子

### 四ツ塚遺跡（宮城県遺跡登載番号：46002）

【調査原因】県道田尻瀬峰線改良工事及び県道拡幅に伴うビニールハウス移転工事

【所在地】宮城県栗原郡瀬峰町大里字中四ツ塚原地内

【調査面積】3,920m<sup>2</sup>（対象面積）

【調査期間】平成4年1月11日、6月16日

【調査主体者】瀬峰町教育委員会教育長 及川 秀美

【調査担当者】瀬峰町教育委員会社会教育課課長補佐兼社会教育主事 阿部 正光

【調査指導】宮城県教育庁文化財保護課

【調査参加者】鎌田 弘司 高橋 甲吾 高橋 正昭

【調査協力】宮城県教育庁文化財保護課、宮城県築館産業振興事務所、瀬峰町菫たばこ生産組合、㈱佐々貞土建

3. 土層の色調表現は『新編標準土色帳（第20版）』（小山・竹原編、1997、（株）日本色研事業）、土性区分については国際土壤学会に準拠している。

4. 国土座標は四ツ塚遺跡は世界測地系、寺浦遺跡と四ツ塚遺跡は日本測地系を用いている。

5. 図中にある方位は、真北を表している。

6. 図面の縮尺は遺構平面・断面図1/60、建物跡1/100、遺物1/3を基本としスケールを添えた。遺物で断面黒塗りは須恵器を示す。また、遺物観察表内の単位はcmである。

7. 四ツ塚遺跡は発掘調査後時間が経過して報告書作成を実施しており、一部で調査記録が確認できないものがある。報告書として不備なものとなったことをお詫び申し上げる。

8. 発掘調査並びに本書作成に際し以下の方々よりご教授をいただきました。

後藤秀一 柳澤和明 佐藤憲幸 村田晃一（宮城県教育庁文化財保護課）、佐藤信行（日本考古学協会員）、佐藤敏幸（東松島市教育委員会）、進藤秋輝（宮城県考古学会会長）、菅原祥夫（福島県文化振興財團）、天野順陽（宮城県多賀城跡調査研究所）、車田敦（田尻町教育委員会）、高橋誠明、大谷基（古川市教育委員会）

9. 本調査によって得られた資料は、すべて栗原市教育委員会で保管している。

10. 本書の整理・執筆は栗原市教育委員会文化財保護課安達訓仁が行った。

## I. 遺跡の位置と周辺の環境

宮城県の北西部に位置する栗原市は岩手、秋田両県と接している。瀬峰地区はその中でも南東端に所在し、宮城県北部を南北に貫く奥羽山脈と、岩手県から宮城県北東部にかけて伸びる北上山地に挟まれた仙北平野低地帯のうち、北上川流域右岸の一角に位置している。ここは奥羽山脈から次第に標高を減じながら南東方向に連なる派生丘陵のほぼ末端部にあたり、周辺には県北湖沼地帯として知られる伊豆沼、内沼、長沼、蕉栗沼が群在する。中でも、蕉栗沼はかつて当湖沼地帯最大の水域を有していたが、江戸時代の新田開発、さらに近年の排水・開田事業によって、現在ではその旧状をほとんどどめていないものの、瀬峰地区を貫流する瀬峰川、小山田川、壹刈川の遊水池として、当地区の東南部に隣接している。



第1図 栗原市の位置

瀬峰地区には東西に横切るかたちでなだらかで低平な4つの丘陵がある。これらの基盤は疊層、砂岩、泥岩、凝灰岩からなる鮮新世：瀬峰層で、その上に疊層と凝灰岩から構成される更新世：高清水層、さらに最上層には第四系のローム層が堆積している。

瀬峰地区には丘陵上に多くの遺跡が所在している。ここではこれまでの調査、研究を踏まえ遺跡周辺の縄文時代から近世にかけての歴史的環境を記述する。

瀬峰地区内では、縄文時代の遺物が出土する遺跡は19ヶ所を数えるが、その年代を特定できる遺跡は少ない。これらはいずれも丘陵上に位置しており、ほとんどで土器の出土が極めて散発的で、しかも、破片が小量しか出土しないというのが現状である。今後、調査が進むと遺跡の数は増加すると考えているが、現時点では当区域における縄文時代のあり方は貧弱であるといわざるを得ない。その理由については現段階では、「縄文時代においては概ね、蕉栗沼沿岸諸遺跡の生活活動を補完する狩猟、採集の場として機能していた」(註1)ためと考えている。

弥生時代の遺跡は瀬峰川と小山田川に挟まれた寺沢丘陵で後期の土器を確認している。

古墳時代前期の遺跡は大塊山遺跡(註2)などがある。寺沢丘陵に立地し、標高約35m前後の丘陵頂部平坦面に11軒の住居跡を近接して発見している。塙釜式期の土師器、紡錘車、砥石、黒耀石製ラウンド・スクレーバーなどが出土しており、住居跡数基を単位とする小集団の様子を具体的に知ることができるものである。中期の遺跡としては荒町遺跡(註3)、泉谷遺跡(註4)で土器を発見している。後期の遺跡には泉谷館跡(註5)、民生病院裏遺跡(註6)、三代遺跡(註7)などがあり、いずれも標高約20～30m前後の丘陵上に位置する。泉谷館跡では11棟の住居跡を検出し、栗圓式期の土器とそれにほぼ併行する関東地方鬼高式期の土器が出土している。同様の関東系土器は出土状況が明確ではないもの

## I. 遺跡の位置と周辺の環境

の民生病院裏遺跡などからも出土している。以上、古墳時代の遺跡の概要を述べたが、いずれも蘿栗沼、もしくは、それに流入する小山田川を間近に望める丘陵上に位置している。よって、当時既に小山田川の土砂運搬作業により徐々に沖積化しつつあった旧蘿栗沼縁辺部において、遺跡ごとに水田経営が展開されていたと推定されるが、今後は各遺跡の編年とその関係をより詳細に究明することが必要である。なお、関東系土器に象徴される関東地方との交流経路については、当地区が海岸部から離れた内陸部に位置するものの、舟を用いて北上川、追川を遡れば容易に宮城県北部湖沼地帯の一つ、旧蘿栗沼に到達しうるという地理的条件を備えていることから、陸路のほかに海路の存在も考えてゆく必要があろう。

瀬峰地区で遺跡の数が最も多いのは奈良・平安時代で50遺跡ある。桃生田前遺跡、下富前遺跡は沖積地を望む微高地に立地している。現在までに寺沢丘陵に位置する岩石I遺跡(註8)、大境山遺跡(註9)、長者原II遺跡(註10)、民生病院裏遺跡(註11)、下藤沢II遺跡(註12)、下藤沢III遺跡(註13)、清水山I遺跡(註14)、下富前遺跡(註15)、桃生田前遺跡(註16)、荒町丘陵に位置する長根遺跡(註17)で集落を調査している。一連の調査によって、多数の住居跡と豊富な遺物を発見しており、宮城県北部における当時の集落構成を考える上で良好な資料を提供している。即ち、35,000m<sup>2</sup>を調査し、23軒の住居跡を検出した大境山遺跡では、各住居跡が適度に散在する現象が顕著に認められるが、こうした傾向は前述の遺跡においても認めることができる。宮城県北部における集落の一タイプとして抽出されるものであろう。一方、集落以外の遺跡はほとんど確認できておらず、蔵骨器が出土した蒲盛遺跡(註18)が墓制に関する遺跡として知られている。

中世の城館跡は藤沢館跡(註19)などがある。瀬峰川沿いの丘陵上に構築された単郭式で小規模のものである。桃生田前遺跡(註16)や下富前遺跡(註20)では発掘調査により小規模な建物や井戸で構成される屋敷を確認している。この他、小山田川南側の丘陵に位置する諸遺跡で中世陶器を採集している。現在までのところ、中世の所産と考えられる塚には泉谷館跡で確認した方形溝状遺構(註5)がある。堆積土の状況や出土遺物からマウンドを持つ室町時代以降の宗教的な壇と考えられている。その他に経塚と考えられる経壇遺跡、鎌倉時代の和鏡が出土した寺沢遺跡がある。なお、板碑(註21)については、大正年間には20数基あったが、近年所在不明となっているものがあり、現在では18基確認されているに過ぎない。

現在の瀬峰地区は、近世においては奥州仙台領栗原郡の藤沢村、富村、中村に分かれていた。藤沢村には栗原郡と登米郡を結ぶ佐沼街道（高清水宿～佐沼宿～登米宿）の宿駅、瀬嶺宿が設置された。この瀬嶺宿の西方2.5km、藤沢村の寺沢地内と富村の北ノ沢地内を横切る旧佐沼街道には一里塚(註22)が2基そろって残っており交通史上貴重な遺構である。泉谷館跡(註26)は、仙台藩士橋本氏（知行高80貫380文）の在郷屋敷である。昭和61・62年度にかけての発掘調査により、5棟の掘立柱建物跡や西門跡、堀跡などを検出している。荒町地区の除と呼ばれる所は仙台藩士蟻坂氏（註23）の在郷屋敷で、寛永21年（1644）、所皆となるまで居住したと伝えられる。地区内には多数の塚があるが、確実に江戸時代とわかるものは、佐沼街道の一里塚、諏訪原経塚(註24)、清林塚(註25)、発掘調査によっ

て盛土を伴う墓であることが判明した下藤沢II遺跡(註12)と下藤沢III遺跡(註26)の塚群があるだけで、ほとんどの所属年代は未だ明らかにされていない。

- 註1 潟峰町教育委員会1985『がんげつI 遺跡第3次調査』瀧峰町文化財調査報告書第5集、3頁。
- 註2 潟峰町教育委員会1983『大堀山遺跡』瀧峰町文化財調査報告書第4集。
- 註3 註2の文献、4頁。
- 註4 潟峰町教育委員会2003『長根遺跡』瀧峰町文化財調査報告書第21集、28、32頁。
- 註5 潟峰町教育委員会2005『東谷館跡 鼻久遺跡』瀧峰町文化財調査報告書第25集。
- 註6 潟峰町教育委員会1988『民生病院裏遺跡』瀧峰町文化財調査報告書第7集。
- 註7 阿部正光1983『瀧峰町三代遺跡出土の土器』『瀧峰町の文化財』第2集 潟峰町教育委員会、1～3頁。
- 註8 潟峰町教育委員会1977『がんげつ遺跡－平安時代の堅穴造構の調査－』瀧峰町文化財調査報告書第1集、1980『がんげつ遺跡第2次調査報告書』瀧峰町文化財調査報告書第3集、1985『がんげつI 遺跡第3次調査』瀧峰町文化財調査報告書第5集、2004『岩石I 遺跡第4次調査』『清水山I 遺跡ほか』瀧峰町文化財調査報告書第22集、41～44頁。
- 註9 註2の文献。
- 註10 潟峰町教育委員会1979『長者原II 遺跡』瀧峰町文化財調査報告書第2集、1988『長者原II 遺跡第2次調査』『昭和63年度宮城県遺跡調査成果発表会』発表要旨、2004『長者原II 遺跡第3次調査』『清水山I 遺跡ほか』瀧峰町文化財調査報告書第22集、18～22頁。2次調査は未報告。
- 註11 註6の文献と瀧峰町教育委員会1996『堅穴住居跡、窓などを検出 民生病院裏遺跡』『広報せみね』No.338。2次調査は未報告。
- 註12 潟峰町教育委員会1988『下藤沢II 遺跡』瀧峰町文化財調査報告書第6集。
- 註13 下藤沢II 遺跡の南側に隣接する。平成7年の調査では古代の住居跡10軒を確認した。未報告。
- 註14 潟峰町教育委員会2004『清水山I 遺跡第1次調査』『清水山I 遺跡ほか』瀧峰町文化財調査報告書第22集、5～14頁。
- 註15 潟峰町教育委員会2000『下富前遺跡』『桃生田前遺跡 下富前遺跡』瀧峰町文化財調査報告書第19集、2002『下富前遺跡』瀧峰町文化財調査報告書第20集、2004『下富前遺跡』瀧峰町文化財調査報告書第23集。
- 註16 潟峰町教育委員会2000『桃生田前遺跡』『桃生田前遺跡 下富前遺跡』瀧峰町文化財調査報告書第19集。
- 註17 註4の文献。
- 註18 阿部・赤澤1984『瀧峰町大里字富蔵盛出土の蟲骨器、および骨片』『瀧峰町の文化財』第3集、6～9頁、瀧峰町教育委員会。
- 註19 白鳥良一『藤沢館跡』『日本城郭体系』3 新人物往来社。註20 註16の文献。
- 註20 佐々木・阿部1982『瀧峰町の遺跡…桃生田前遺跡／下富前遺跡／中三代遺跡…』『瀧峰町の文化財』第1集、2～3頁と註15の文献。
- 註21 鈴木玄雄1922「古碑」『栗原郡栗原村誌』上巻栗原郡栗原村誌編纂委員会、208～215頁と瀧峰町史編纂委員会1966「町内の古碑」『瀧峰町史（全）』瀧峰町、394～398頁、瀧峰町教育委員会1988「板碑・近世墓標」『下藤沢II 遺跡』瀧峰町文化財調査報告書第6集、83～88、92、105頁、瀧峰町史編纂委員会2005『瀧峰町内の板碑』『瀧峰町史増補版』、70～78頁。
- 註22 宮城県教育委員会1997『瀧峰一里塚』『宮城県の文化財』、206頁。
- 註23 蟻坂花子1979『河北の碁一里坂文書とその背景－』篆氣印刷出版株式会社。
- 註24 佐々木・阿部・赤澤・佐藤1987「瀧峰町内にある板碑・石碑調査（6）」『瀧峰町の文化財』第6集、34頁。
- 註25 佐藤・阿部・赤澤1986「昭和60年度瀧峰町文化財バトロール事業報告」『瀧峰町の文化財』第5集、5～6頁。
- 註26 下藤沢II 遺跡の南側に隣接する。平成7年に発掘調査を実施し、盛土を持つ近世墓6基を調査している。未報告。

## I. 道路の位置と周辺の環境



No.	道 路	種 別	時 代	No.	道 路	種 别	時 代	No.	道 路	種 別	時 代
1	玉環道路	環、帯地	古代、中世(?)	26	八幡山道路	環	中世、近世	51	野沢道路	帯地	古代
2	西ノ塙遺跡	環、點地	古代、中世(?)	27	長者山道路	集落路	古代	52	高台山社遺跡	帯地	漢文、古代
3	御前塙遺跡	點地、点、圓形遺跡	漢文、古代、中世	28	一本松道路	帯地	古代	53	貴民山道路	帯地	漢文、古代
4	伊勢笠置跡	環、点地、城郭跡	漢文、古代、中世	29	大坂山道路	集落路	漢文、古生、古墳、古代	54	豊見山道路	集落路、城郭跡	漢文、古代、中世
5	藤丸跡跡	城郭跡	中世	30	安ノ下原Ⅱ遺跡	帯地	古代	55	藤久路跡	帯地	漢文、古代
6	空院跡跡	点地	漢文(前)	31	新田道路	帯地	古代	56	大寺寺跡	帯地	漢文、古生、古墳、古代
7	砂田跡跡	点地	古代	32	安次東道路	集落路	漢文、古代	57	新日吉跡	城郭跡	平安、中世
8	前石ノ塙跡	集落跡、環	古代(前)、漢文、古墳、近世	33	桃生山道路	集落路	古代、中世、近世	58	外沢川道路	帯地	古代
9	下山道路	点地	古代	34	下室道路	集落路、巣石	漢文、古代、中世	59	下野木道路	集落路	平安
10	二丸跡跡	点地	古代	35	有野一ノ塙道路	集落路	漢文、古代	60	下野野跡	帯地	古代、古世
11	荒町跡跡	点地	漢文、古代、古世	36	中二門跡跡	集落路	古代	61	安ノ門道路	帯地	古代
12	筒ノ崎道路	点地	漢文(前)、古代	37	兵船道路	帯地	古代	62	東山道路	帯地	漢文、後聖、古墳、古代、平安
13	柴谷道路	点地	漢文、古世、古代	38	五輪山の遺跡	集落路	古代	63	外沢川道路	集落路	古代
14	長者山Ⅰ道路	点地	古代	39	足ノ沢道路	帯地	古代	64	高台山城跡	城郭跡	中世、近世
15	下藤ノ上遺跡	集落跡、環	古代、近世	40	清水山遺跡	環	中世、近世	65	天狗寺道路	集落路	漢文、古代
16	和ノ塙道路	点地、帯地	古代、中世、近世	41	舟沢道路	集落路、環	古代、中世、近世	66	大屋寺道路	帯地	古代
17	下藤ノ豆遺跡	点地、環	古代、中世、近世	42	清瀬道路	火葬場	古代	67	和ノ塙路	道路	古代
18	御園跡跡	城郭	近世	43	今瀬道路	點地	漢文	68	六日町道路	帯地	古代
19	御塙道路	帯地、環	古代、中世、近世	44	林原城道路	環	近世	69	新御塙道路	帯地	漢文、古代
20	古塙道路	点地	中世、近世	45	豊石山道路	帯地	漢文	70	船舟寺道路	帯地	漢文
21	清水山Ⅰ道路	集落跡	古代	46	桃生山道路	帯地	古代	71	若林道路	帯地	漢文
22	下藤ノ上道路	集落跡	古代	47	瀬野一ノ塙	環	近世	72	長沢寺道路	帯地	漢文、古代
23	坂ノ下洋Ⅰ道路	集落跡	漢文、古代	48	四ツ塙道路	環	平安?	73	古城下道路	帯地	漢文、古代
24	二ノ塙道路	集落跡	古世、古代	49	神田道路	集落	古代	74	内山道路	帯地、斜面	漢文、中世、近世
25	生ノ内向糞糞道路	集落路	古世、古代	50	四ツ塙道路	帯地	漢文、古代	75	吉田田道路	帯地	漢文

第2図 四ツ塙遺跡ほかの位置と周辺の遺跡

## II. 四ツ壇遺跡

### 1. 調査に至る経緯

平成15年6月、瀬峰町産業課より瀬峰町大里字中伊勢堂地内において宮城県農業公社の補助事業による堆肥舎建設造成計画についての連絡があった。対象地は埋蔵文化財包蔵地とは認識していない地点であったが、伊勢堂館跡、神田遺跡、四ツ壇原遺跡に囲まれているので、宮城県教育庁文化財保護課と協議を行い、試掘を行なうこととした。削平予定地点の畠地2筆分について1.5m四方の調査区を6ヶ所設定し、手掘りで掘り下げた。南側では耕作土直下で地山、北側では黒色土が残存していたが、遺構は確認することができず全体的に開田により削平を受けていると想定した。この結果を県文化財保護課に連絡し、現段階では埋蔵文化財包蔵地としては取り扱わないこととした。しかし、対象地は民家との距離が近く同意が得られないことから改めて対象地を探すこととなり、あらたな対象地が瀬峰町大里字中諏訪原地内であるとの連絡があった。四ツ壇遺跡の北側に隣接する地点であったので踏査を行い、南西隅は農道との差が1mほどあり削平を受けていると想定した。



第3図 四ツ壇遺跡と調査区の位置

しかし、農道部分で須恵器片を採集したことから遺構の有無を確認する必要があるとの判断にいたった。このことを宮城県教育庁文化財保護課に連絡するとともに、8月22日に農業公社、産業課、事業者による現地会いの際に協議が必要であることを伝えた。

12月21日まで連絡がなく、既に工事を開始する直前になっているのを発見したので、12月22日、農業公社、町産業課、施工業者に連絡を行い、工事の一時中止と協議書の提出を求めた。また、宮城県教育庁文化財保護課と協議を行い、確認調査を実施することとした。確認調査は12月23日に実施し、削平を受ける部分の表土を重機により除去したところ、中央付近で1号住居跡、西側で2号住居跡を確認した。1号住居跡はすでに床面が露出していた。12月24日に文化財保護課に確認調査の結果を伝え、遺跡範囲の拡大を行うとともに引き続き調査を行なうこととし、北側の田面についても確認調査を行なうよう指導があった。また、農業公社に遺構を確認したことを伝えた。12月25日より調査区を拡張し、北側水田（II区）の確認調査を行なうとともに精査を進めた。その結果、住居跡3棟、土坑3基があることが判明した。さらに1号住居跡は削平を受けていたが、鍛冶を行なったとみられるがや焼け面が確認できたので土壌サンプルの採集を実施した。また、2、5号住居跡は壁面が30cm残存し、残存状況が良好であることを確認した。5号住居跡ではカマド前面に土師器壺を置き、袖外側が火熱により赤変するとともに初期堆積土を炭化物が覆っている状況から住居廃絶後に何らかの祭祀を行なっていることが判明した。その後、1/20の平面図、断面図、1/100により調査区の平面図、35ミリ（モノクロ、リバーサル）とデジタルカメラで写真記録を作成し、1月10日に作業のすべてを終了し、現場を引き渡した。その後、1月20日より堆肥舎の基礎掘削及び素掘り側溝の掘削の際、建物範囲西側部分の立会いを行った。素掘り側溝地点の法面で土坑状の落ち込みを確認したので断面図作成を行い、野外作業を終了した。

整理作業は1月6日から15日まで遺物の水洗いを実施し、3月20日以降接合作業、復元作業など本格的に開始した。3月下旬に土壌サンプルの水洗いを行い、鍛造剣片の有無について確認作業を行った。また、5～7月に平面図の整理や遺物実測図作成を行ったが、市町村合併などの準備のため一時作業を中止して平成17年4月下旬より改めて整理作業を再開した。その後に本文の作成を行い、平成18年3月20日に作業を終了した。

## 2. 基本層序

調査区内の基本層は次のとおりである。

I層 黒褐色(10YR3/1)シルトで地山ブロック、黒色シルトを多く含む。しまりはややある。開田時の整地層であり、遺跡内での表土である。

II層 褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト。しまりなく、粘性がある。酸化鉄を斑状に含み遺跡内では西側に分布する。開田以前の表土か耕作土である。

III層 明黄褐色(10YR6/6)粘土である。厚さは約20cmである。また、その下部では灰黄褐色(10YR6/2)粘土が確認できる。地山である。

I区東側は開田による削平を受けておりI層直下でIII層、中央付近から西ではII層を除去するとIII層となる。遺構の確認作業はすべてIII層上面で行った。II区ではI層直下でIII層を検出した。

### 3. 検出した遺構と遺物

検出した遺構は堅穴住居跡3棟、土坑4基、溝跡1条である。このうち、土坑1基は素掘り側溝掘削の際発見したものであり、断面でのみ観察を行なった。遺物は遺構や表土から土師器、須恵器、土製品、陶製品、石製品、石製模造品、鉄製品が出土している。

#### (1) 堅穴住居跡と出土遺物

##### 1号住居跡

【位置】 I区中央付近。

【確認面】 III層上面。

【重複】 1号住居跡→5号住居跡、4号土坑、7号溝跡。

【平面形】 圓丸方形。北辺東隅から中央付近と西隅は削平される。

【規模】 東西5.65m、南北4.89m

【方位】 N-26° -E (西辺)。

【層位】 1層。自然堆積。

【壁】 III層。南辺で0.06m残存。ほぼ垂直に立ち上がる。

【床面】 掘り方理土、III層を床としほ平垣。

【延べ床面積】 27.63m<sup>2</sup>。

【掘り方】 堅穴中央から東側にかけてはIII層、そのほかの部分では掘り方理土を床としており、掘り方は東側が浅く、西側が深い。深さは0.03~0.26mである。

【柱穴】 ピット11基を確認した。平面形は楕円形から圓丸方形であり、8基で抜き取り痕跡を確認した。抜き取り痕跡に焼土粒、炭化物を含むものと含まないものがある。

	柱穴			有無	抜き取り	柱頭跡		その他	時期
	平面形	規模	深さ			埋土	堆積土		
P1	圓丸方形	40×24	20	○	にぶい黄褐色粘土、黒色土粒若干	○	にぶい黄褐色粘土、黒色土粒・焼土粒	14	32 堅穴外。
P2	椭円形	40×40	30	○	黒褐色粘土、地山粒多	○	にぶい黄褐色粘土、地山粒多	—	堅穴外、P7より新。 挖乱か。
P3	椭円形	28×(20)	11	○	にぶい黄褐色粘土、黒色土粒	○	黒褐色シルト質粘土、地山粒、炭化物	—	掘方除去中検出。
P4	圓丸長方形	30×22	32	×	黒褐色粘土、地山粒	×	—	15	32 7溝と重複。堅穴外。
P5	圓丸長方形	29×18	42	○	黒褐色粘土、地山粒	○	黒褐色粘土、地山粒	12	42 堅穴外。
P7	椭円形	25	22	○	にぶい黄褐色粘土、地山粒・黒色土粒多	○	黒褐色粘土、地山粒・炭化物	—	— P2より古。
P8	圓丸方形	40×34	22	○	にぶい黄褐色粘土、地山粒	○	黒褐色粘土	—	掘方除去中検出。
P10	圓丸長方形	37×32	30	○	灰黃褐色粘土・黒色土多	○	黒褐色シルト、地山粒・黒色土粒・焼土粒	—	— K3より新。
P11	圓丸長方形	36×20	35	×	にぶい黄褐色粘土、黒色土多	×	—	—	掘方除去中検出。
P13	圓丸長方形	34×27	57	○	にぶい黄褐色粘土、黒色土	○	黒褐色粘土、地山粒	—	— 掘方除去中検出。
P14	圓丸長方形	30×22	15	未記録	×	—	—	— 7溝と重複。	A

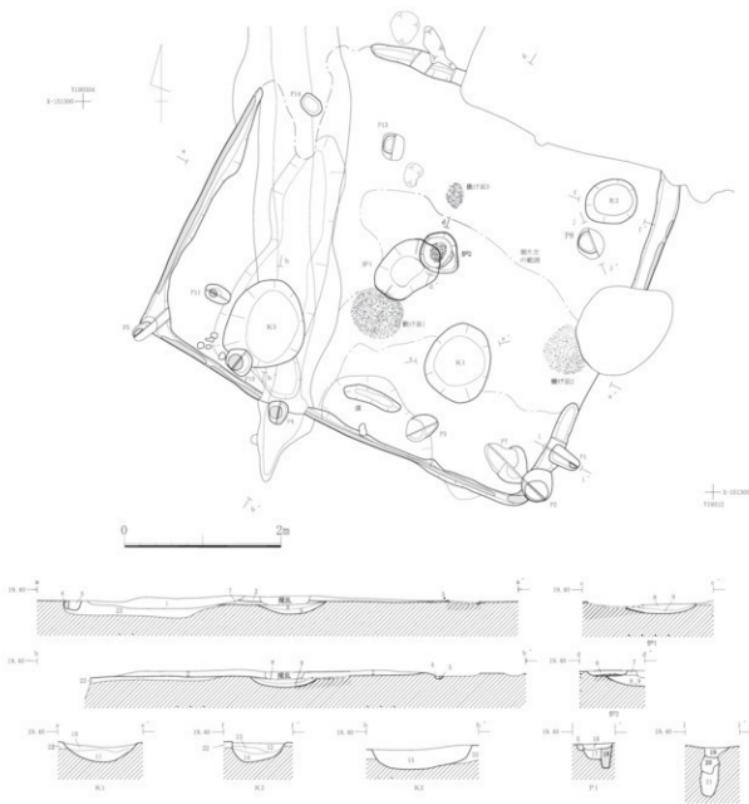
第1表 柱穴の規模

(単位: cm)

【溝】 南辺中央付近にある。長さ0.75m、幅0.18m、深さ0.06mであり、断面はU字形である。堆積土は地山粒、炭化物、焼土を含む黒褐色粘土である。堆積土を水洗したところ粒状滓を確認した。

【土坑】 3基確認。南辺東側、南辺西側、北辺東側に位置する。いずれも椭円形で断面はU字形である。

II. 四ツ堆遺跡



層	上色	上性	考	堆積範囲
1	灰褐色(10R8/4)	シルト	下部に地山粒を多く含む。	7溝埴土 堆積土
2	褐色(10R8/1)	粘土	地山粒、小ブロックをまばらに含む。	堆積土
3	褐色(10R8/1)	粘土	地山、炭化物をまばらに含む。2号引け面付近にのみみられる。	材痕跡 周溝
4	黒褐色(10R3/2)	粘土	細かい地山粒を若干含む。	4号2
5	灰・泥・黄褐色(10R5/4)	粘土	地山を多く、黒褐色をまばらに含む。	4号2に伴う貼床
6	黒褐色(10R1/2)	シルト	細かい地山粒を多く、炭化物、地山粒をまばらに含む。	4号1
7	褐色(10R8/1)	粘土	地山ブロックをまばらに含む。	
8	灰・泥・黃褐色(10R5/4)	粘土	地山・小ブロックをまばらに、黒褐色シルトをまばらに含む。	
9	黒褐色(7.5R2/2)	シルト質粘土	地山・地化物、地山ブロックをまばらに含む。	
10	黒褐色(10R5/6)	粘土	黒褐色、地山粒をまばらに含む。	K1
11	褐色(10R8/1)	シルト	地山粒、地山粒を多く含む。	
12	黒褐色(10R3/2)	シルト質粘土	地山粒、小ブロックを多く含む。地山、炭化物をまばらに含む。	K2
13	黒褐色(10R3/1)	シルト質粘土	地山粒、小ブロックをまばらに含む。	K3
14	灰・泥・黄褐色(10R4/3)	粘土	地山粒、黒褐色を多く、炭化物を若干含む。	P1抜き取り P1材痕跡 P1削り方
15	灰・泥・黃褐色(10R5/4)	粘土	地山粒、黒褐色を多く含む。	P2抜き取り
16	灰・泥・黃褐色(10R4/3)	粘土	黒褐色土、地山粒をまばらに含む。	P3削り方
17	黒褐色(10R3/1)	粘土	黒褐色土粒を若干含む。	
18	黄褐色(10R5/6)	粘土	地山土粒を多く含む。	
19	黒褐色(10R5/3)	粘土	地山土粒を多く含む。	
20	黒褐色(10R5/1)	粘土	地山土粒を多く含む。	
21	灰・泥・黃褐色(10R5/3)	粘土	地山粒を多く含む。	
22	灰・泥・黃褐色(10R5/4)	粘土	地山土を多く、黒褐色をまばらに含む。	掘り方堆土

第5図 1号住居跡

〔 爐 〕 竪穴中央で 2 基確認。正確な範囲は確認できなかったが炉 1 に貼床した後、炉 2 が構築されていることから炉 1 が古く、炉 2 が新しい。炉 1 は隅丸長方形で南北 0.62m、東西 0.89m、深さ 0.24m である。堆積土は上層がにぶい黄褐色粘土で非常に硬く、下部では焼土粒、炭化物、地山ブロックを含む黒色土である。南側では焼け面 1 による赤変の影響により掘り方範囲が非常に確認しづらい。炉本体あるいは羽口の可能性のある土製品が出土している。炉 2 は円形で南北 0.50m、東西 0.56m、深さ 0.08m である。底面は平坦であり、底面中央には 0.17~0.24m の範囲に焼面があり硬化している。

〔焼け面〕 焼け面 1 ~ 3 を確認。火を受け非常に強く赤変する。

〔周溝〕 東辺中央付近をのぞき、全周する。幅 0.10~0.22m、深さ 0.09~0.14m である。部分的に板材をめぐらせ壁を補強した痕跡を確認した。板痕跡は幅 0.05~0.09m、深さ 0.08~0.14m である。

〔出土遺物〕 堆積土より須恵器坏、甕か壺、土師器坏、甕、土坑より須恵器坏、甕、土師器坏、鉢、甕、炉本体か羽口の破片、溝より土師器坏、甕、炉本体か羽口の破片、粒状滓、炉 1 より炉本体か羽口の破片、砥石、板材痕跡上面より鉄製品(刀子破片) 2 点、ビットより須恵器坏、甕、土師器坏、甕、掘り方より須恵器坏、甕、土師器坏、甕が出土している。須恵器では色調が白色で軟質のものがある。土師器はいずれも製作にロクロを用いるものであり、坏では内面黒色処理、ミガキが行われ、甕ではケズリ調整が行われるが、いずれも小片であり特徴を把握できない。

## 2号住居跡

〔位置〕 I 区南西付近。

〔確認面〕 III 層上面。

〔重複〕 2 号住居跡 → ビット。

〔平面形〕 隅丸長方形。北西隅が東西 1.72m、南北 0.80m の範囲で方形に張り出す。

〔規模〕 東西 4.07m、南北 3.31m。

〔方位〕 N-33° -E (西辺)。

〔層位〕 大別 2 層。いずれも自然堆積。床面上では形状がわかる炭化材や炭化物、焼土を多数確認したことから住居は焼失したものと考えられる。住居廃絶後、自然に埋没する過程で窪地となつた部分に多数の土器が廃棄されている（上層出土遺物）。

〔壁〕 III 層。北東隅付近で 0.31m 残存。ほぼ垂直に立ち上がる。

〔床面〕 掘り方埋土を床とし、ほぼ平坦。床面上で焼土、炭化物が集中する範囲を 2ヶ所で確認。

〔延べ床面積〕 14.67m<sup>2</sup>。

〔掘り方〕 掘り方は 0.08~0.22m の厚さを持ち、南西方向に傾斜する。

No	平面形	規 模	深さ	断面	その他の
K1	椭円形	95×81	27	U形	
K2	椭円形	68×56	24	U形	
K3	椭円形	109×100	32	U形	K3→P10

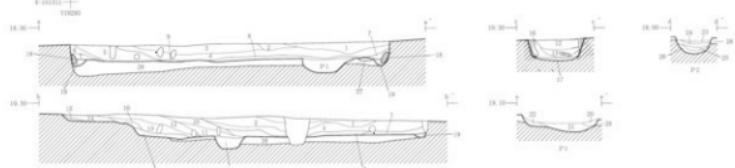
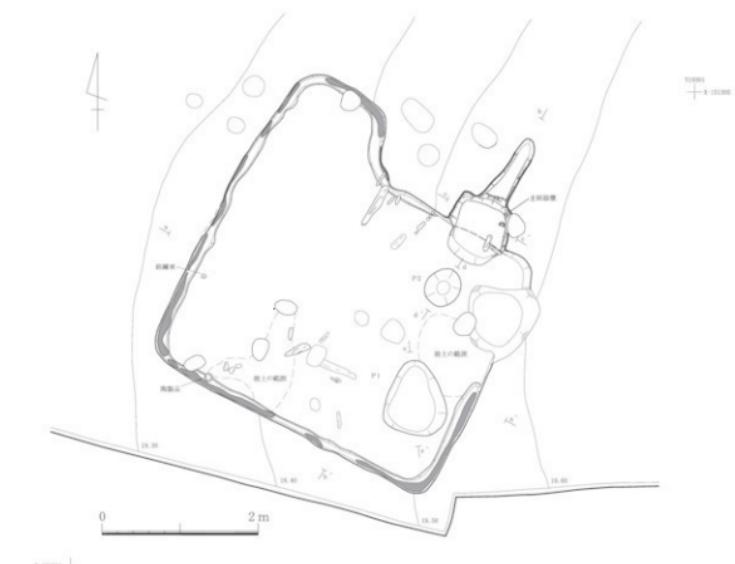
第 2 表 土坑の規模

(単位: 2cm)

No	平 面 形	規 模 (cm)
焼け面 1	椭 圆 形	68×60
焼け面 2	椭 圆 形	58×(48)
焼け面 3	椭 圆 形	32×24

第 3 表 焼 け 面

## II. 四ツ塙遺跡



列	土色	土性	備考	堆積範囲
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山上を若干合む	
2	黒色(10R2/1)	シルト	地土層、炭灰物を多く含む。土結合物	
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物が多く、地土層をまだらに含む。土胞を含む	大別1層(上層)
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物をまだらに、地土層を若干含む	
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山上を多く含む	
6	黒褐色(10YR3/1)	シルト	細かい、地面上を含む	
7	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	地面上を含む。地面上合む。6層より細い。	
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物を含む。地山層を含む。	大別2層
9	黒褐色(10YR3/2)	シルト	8層と同質で炭化物、地山層を若干。地土を含む	
10	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山層、燒き灰、炭化物(材)を多く含む	
11	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	細かい、地面上を含む	
12	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	細かい、地面上を含む。層から地山層を若干含む	
13	黒褐色(10YR3/2)	粘土	細かい、地面上を含む。粘土を多く含む(層に燃焼漆器が多い)。炭化物(材)を含む	
14	暗褐色(10Y4/2)	シルト	地土を含む。地土を多く含む	カマド
15	黒褐色(5YR3/1)	シルト	地土を含む。地土を若干含む	
16	燒土網		黒色を若干含む	
17	黒褐色(7.5YR6/1)	粘土	地土ブロック、炭化物(材)を多く含む。細通路	
18	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	地土を若干含む。黒色土若干。層間隙より色がくすむ	川瀬掘り方
19	暗褐色(10Y5/3)	粘土	地山土を多く含む。地土を若干含む	
20	黒褐色(10YR3/1)	粘土	地土層、炭化物、地山層を含む	
21	黒褐色(10YR3/2)	粘土	地土層、炭化物を多く含む。地土を若干含む	ピット1
22	黒褐色(10YR3/1)	粘土	地土層を多く含む。地土層、地土を若干含む	
23	黒褐色(10YR3/1)	粘土	地土層を多く、地山層、炭化物を少量含む	
24	暗褐色(7.5YR6/2)	粘土	地山層、黒色土、地土を若干含む	ピット2
25	黒褐色(10YR3/1)	粘土	地土層を多く含む	
26	暗褐色(10YR4/30)	粘土	地山層、地土を若干含む	
27	黒褐色(10YR4/30)	粘土	地山層を多く含む	
28	暗褐色(10YR4/30)	粘土	地山層を多く含む	

第6図 2号住居跡

【カマド】北辺中央、やや東寄りに位置する。燃焼部と煙道部からなりいずれも堅穴外に張り出す。長軸1.74m。燃焼部の幅は最大0.80m、煙道部では0.29mである。燃焼部の側壁と奥壁の一部が火熱により赤変している。

【柱穴】確認できない。

【ピット】2基確認した。ピット1は南東隅付近に位置する。南北1.05m、東西0.75mの梢円形で深さは0.24mである。堆積土上層に焼土を多く含んでいることから住居機能時には開口していたものと考えられる。ピット2はカマド前面に位置する。南北0.47m、東西0.43mの円形である。底面は皿状で壁はやや急に立ち上がる。堆積土は焼土や炭化物を含む黒褐色粘土で自然堆積である。

【周溝】カマド部分と北東隅付近を除き、北西隅の張り出し部分も含め全周。最大幅0.20m、深さ0.07m。底面はほぼ平坦で、壁は堅穴壁側がほぼ垂直から一部堅穴外に入り込み、堅穴内部ではやや急に立ち上がる。堆積土は1層で人為堆積。周溝内で堅穴壁を押さえるための板痕跡を確認。幅0.05~0.10mで部分的に分布する。

【出土遺物】床面から土器製品（紡錘車）、陶製品、カマド内から支脚として転用された製作にロクロを用いない土師器小甕、掘り方から土師器の破片、上層からは土師器壺、高台杯、甕、鉢、須恵器壺、甕、鐵製品（鉄鍊）などが出土している。上層出土遺物は器形が判明するものが多い。土師器壺、高台杯、鉢はいずれも製作にロクロを用いるもので、内面はミガキ・黒色処理が施される。甕では製作ロクロを用いるものと用いないものがある。外面にケズリ調整、内面にはナデ調整が行われるものがあり、口縁部には断面四角形のものがある。須恵器壺は底部切り離しが回転条切り無調整のものと再調整を行うものがある。甕では口縁部に波状文を持つものや体部に平行タタキやケズリ調整を持つもの、内面はナデや青海波紋の押さえ痕跡を持つものがある。

No.	棚位	遺物名	現存	器高	口径	底径	特徴	備	貸 緑	国 取
1	上層	土師器壺	底部	—	—	7.4	外：ロクロナヂ、口5cm幅（2.5186/4）、底部：回転条切り一縁辺をナヂ、内：ロクロナヂ、モガキ・黑色施作、底（1092/1）		B029	—
2	上層	須恵器壺	底部	—	—	6.0	外：ロクロナヂ、底（10906/1）、底部：回転条切り、内：ロクロナヂ、底（1085/1~4/1）		B031	—
3	上層	須恵器壺	底部	—	—	6.2	外：ロクロナヂ、口5cm幅（10927/2）、底部：回転条切り、内：ロクロナヂ、モガキ・黑色施作、底（10927/2）		B030	—
4	上層	須恵器壺	底部	—	—	6.4	外：ロクロナヂ、部手持ちハラケヅリ、灰黄（2.516/2）、底部：回転条切り→ヘラナヂ、内：ロクロナヂ、底施作、底（2.516/2）		B029	4
5	上層	須恵器壺	底部	—	—	10.6	外：ロクロナヂ、手持ちハラケヅリ、底白（10927/1）~底施作（10886/1）、底部：回転条切り→ヘラナヂ、内：ロクロナヂ、底（327）		B038	—
6	上層	須恵器壺	底部	—	—	5.8	外：ロクロナヂ、灰黄（2.517/2）、底部：回転条切り、内：ロクロナヂ、灰黄（2.517/2）		B032	—
7	上層	須恵器壺	頭部	—	—	—	外：ロクロナヂ、施作波状文、底（NS57/547）、内：ロクロナヂ、明オリーブ灰（2.5077/1）		B007	4
8	カマド	土器製品	灰 瓶	12.7~ 13.3	12.1~ 14.5	6.5	外：破片、タタキ、内：灰白（5187/4）、底部：木葉瓶、内：破片、タタキ、内：灰白（5187/1）		B006	4
9	上層	須恵器壺	底 部	—	—	—	外：手付タタキ、一部ヘラナヂ、底（35/5）~灰白（2.5038/1）、内：ヘラナヂ、底（36/1）		B033	—
10	床面	土 製 品	完 整	長さ：5.9、幅：6.0、厚さ：2.5、重さ：86.4g、孔の大きさ：0.8、調節：ナヂ、無調節、色調：墨褐（10930/1）					B005	4

第4表 2号住居跡出土遺物（1）観察表

## 5号住居跡

【位置】I区中央北側。

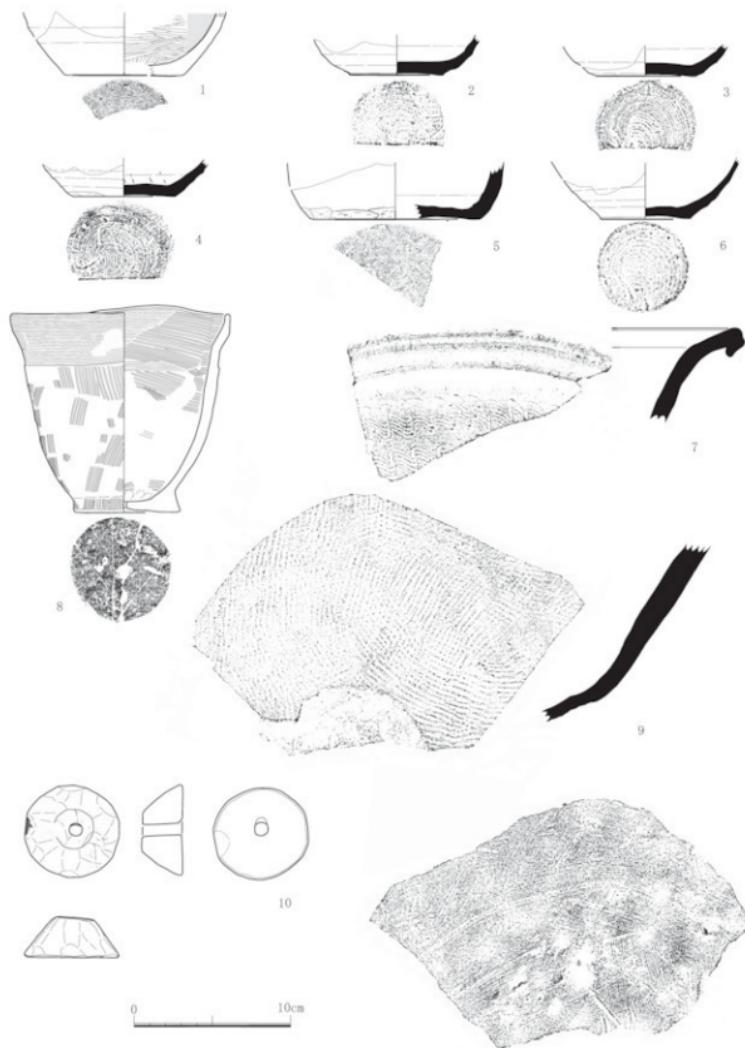
【確認面】III層上面。

【重複】1号住居跡→5号住居跡→6号土坑。

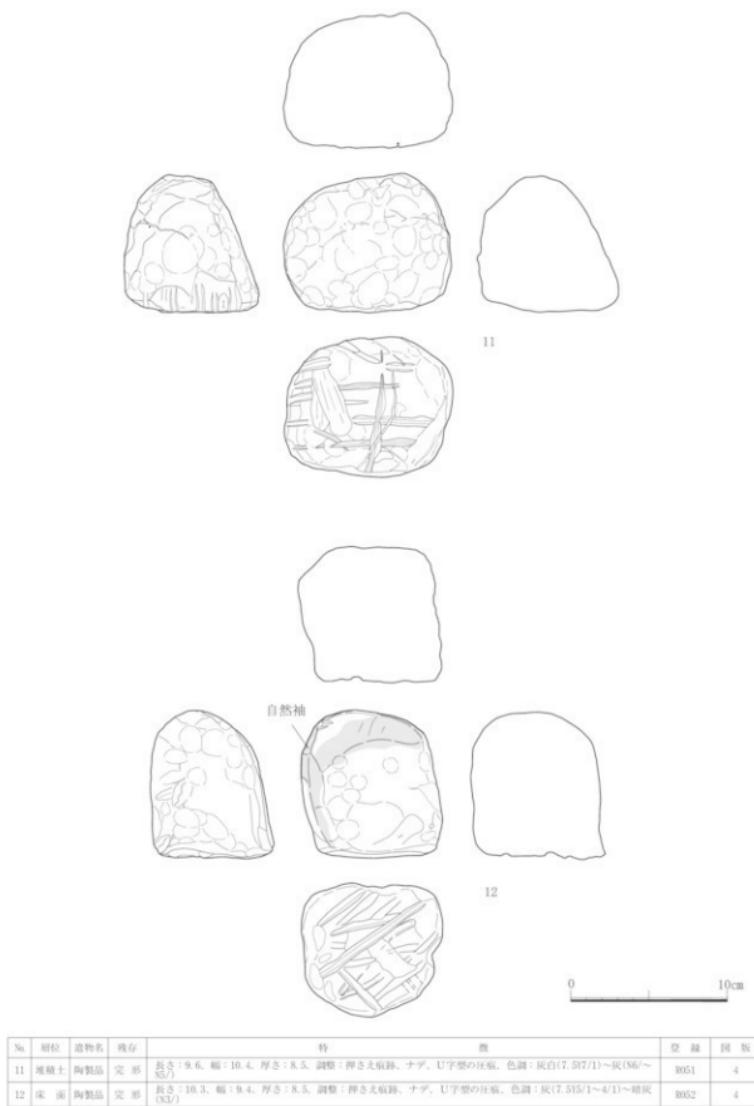
【平面形】北側が削平されるが、隅丸方形と推定される。

【規模】東西4.66m、南北4.36m以上。

II. 四つ堆遺跡

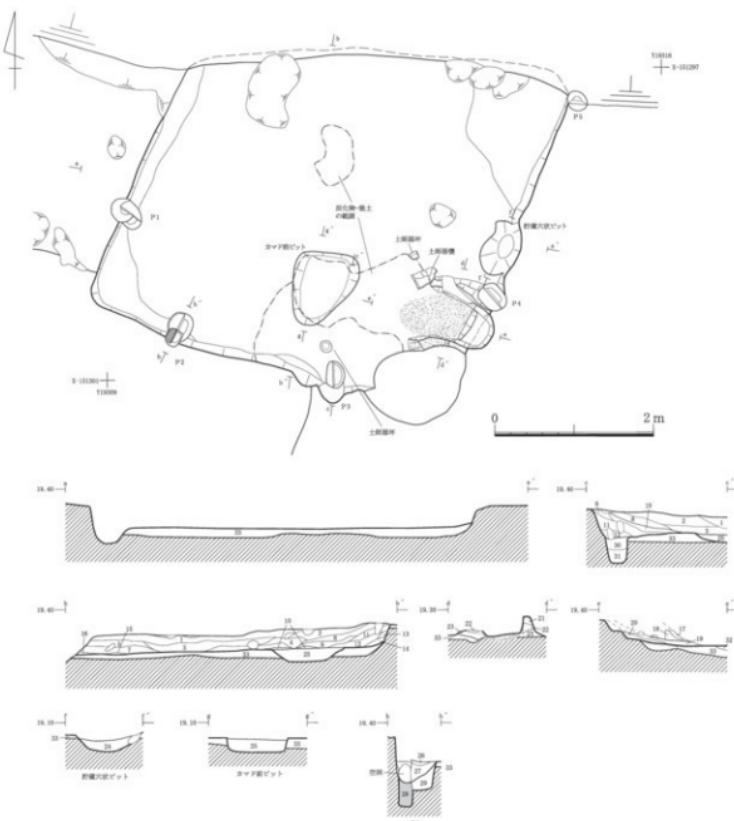


第7図 2号住居跡出土遺物（1）



第8図 2号住居跡出土遺物（2）

II. 四ツ塹遺跡



第9図 5号住居跡

【方 位】 N-23° - E (西辺)。

【層 位】 大別3層。1層は上部に灰白色火山灰層を含むので、自然堆積。3層は床面を覆う初期堆積土である。自然堆積で南側に分布する。2層上面には薄く炭化物層(2層)が堆積する。

【壁】 III層及び1号住居跡堆積土を壁とする。南辺中央付近で最大0.30m残存。床面から急に立ち上がる。

【床 面】 挖り方埋土を床とし、床面上で焼土、炭化物が集中する範囲を3ヶ所で確認した。床は中央に向かいゆるやかに傾斜するもので、竪穴壁側が高く、中央部分が低い掘り鉢状となる。最大0.14mの比高差がある。

層	土 色	土 性	礫	基 着 地 構 築 物	堆 積 範 囲
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	細かい地山粒を多く、灰白色火山灰ブロックを含む。		
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土粒、炭化物を若干含む。		
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	細かい地山粒を若干含む。		
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物をまばらに、焼土粒を若干含む。		
5	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物、細かい地山粒を多く、焼土粒を若干含む。	大別1層	
6	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物、細かい地山粒を多く含む。		
7	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土粒、炭化物、細かい地山粒を若干含む。		
8	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物、細かい地山粒、焼土粒を多く含む。		
9	黒褐色 (10YR3/1)	シルト質粘土	炭化物、細かい地山粒を若干含む。	大別2層	
10	焼土層		炭化物をやや多く含む		
11	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	細かい地山粒を多く、ブロック状の炭化物を若干含む。		
12	黒褐色 (10YR3/1)	シルト質粘土	細かい焼土を若干含む。		
13	黄褐色 (10YR5/6)	粘土	地山粒、黒色土粒を多く含む。		
14	黒褐色 (10YR3/2)	シルト質粘土	黒色土粒、地山粒を若干含む。	大別3層	
15	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	地山土を多く含む。		
16	焼土層				
17	明黄褐色 (10YR7/6)	シルト質粘土	地山粒を若干含む。		
18	明黄褐色 (2.5YR8/8)	粘土	焼土粒を含む、土器、礫を含む。下部は火熱により厚く赤変する。		カマド天井部崩落土
19	黒褐色 (5YR3/1)	粘土	焼土、炭化物を多く含む、機能時。		カマド機能時
20	黒褐色 (10YR3/1)	粘土	焼土粒、炭化物をやや多く含む、機能時。		
21	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘土	地山、黒色土を多く含む。		
22	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	白色粘土、黄色粘土ブロックを含む。		カマド袖構築土
23	黒色 (10W2/1)	粘土	地山土、黒色土を多く含む。		
24	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土	地山土、黒色土を多く含む。		貯藏穴ビット
25	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土	地山土、黒色土を多く含む。		カマド前ビット
26	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	細かい地山粒をまばらに含む。		P2抜き取り
27	明黄褐色 (10YR6/8)	粘土	白色粘土を含む。		
28	黒褐色 (10YR3/1)	粘土	地山小ブロックをまばらに含む。		P2柱痕跡
29	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	地山小ブロックを若干含む。		P2掘り方埋土
30	褐色 (10Y4/4)	粘土			P3抜け取りか
31	褐灰色 (10Y4/1)	粘土	細かい地山粒を含む。		P3掘り方
32	黒褐色 (10Y3/2)	シルト	地山ブロックをまばらに含む。上面に焼土、炭化物層が薄く堆積する。		掘り方埋土
33	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘土			

第5表 5号住居跡土層記註

〔延べ床面積〕 19.57m<sup>2</sup>以上。

〔掘り方〕 掘り方は0.05~0.13mの厚さを持ち、竪穴中央付近が薄く、竪穴壁側で厚くなる。底面は中央付近で若干窪むがほぼ平坦である。

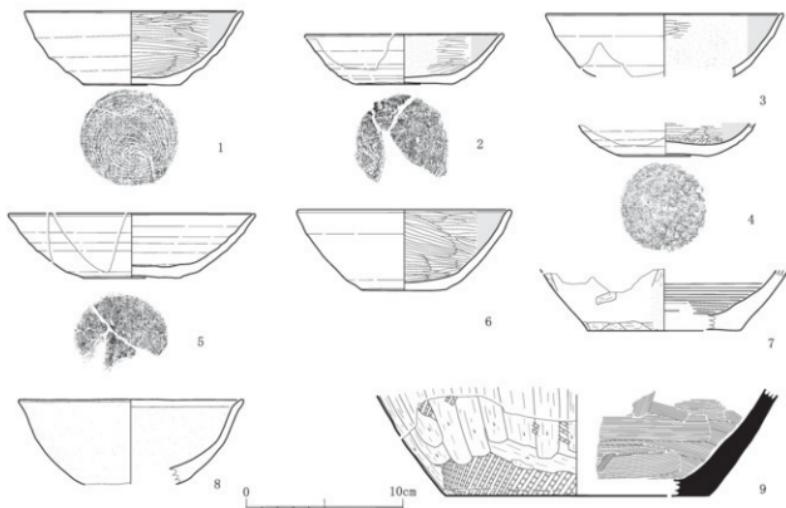
〔カマド〕 東辺南側に位置するもので竪穴外をU形に掘り込み、天井部及び側壁を貼り付けて構築されている。燃焼部と煙道部からなる。総長1.2m。燃焼部は長さ1.0m、幅(内側)0.62m。底面はほぼ平坦であり、奥壁部分で急に立ち上がる。側壁は黄褐色粘土と黒色粘土を用いて構築されており高さ0.2mほど残存する。天井部はカマド内に崩落した状況で確認した。天井部構築土には砥石や土器が多数含まれている。底面、奥壁および側壁は火熱をうけ赤変し硬化する。また、崩落した天井部下部も同様の状態であった。カマド機能時の堆積土からは天井部あるいは側壁が剥がれ落ちたもののが数個見つかっている。

煙道部は燃焼部と一連のもので長さ0.2m、幅0.45mである。カマド構築に際し燃焼部と煙道部を同時に掘り込み粘土を貼付して天井を構築したものである。

〔柱穴〕 竪穴壁を掘り込む竪穴外に張り出すピット5基確認。1辺に2個あり、各辺にあるピットは対応する位置にあること、竪穴内部で柱穴を確認できないことからピット1~5が主柱穴と考えられる。平面形は

No	平 面 形	大きさ (cm)	深 さ (cm)	抜きの 有無
P1	椭 圆 形	38×28	20	○
P2	椭 圆 形	40×30	41	○
P3	椭 丸 方 形	30×25	36	○
P4	椭 丸 方 形	35×28	19	×
P5	椭 丸 方 形	26×22	7	×

第6表 柱穴の規模



No.	層位	遺物名	残存	器高	口径	底径	特徴		登録	図版	
							外:ロクロナデ、縫(5YR7/6)、底:回転条切り、内:ロクロナデ、ミガキ・黒色處理、黒(NL1.6)	外:ロクロナデ、にぶい黄澄(10YR7/4)、底:不明→手持ちヘラケズリ、内:ロクロナデ、ミガキ・黒色處理、黒(NL1.6)			
1	炭化物層 土師器環	4/5	4.7	13.8	6.1				R001	4	
2	カマド内 土師器環	3/5	3.3	12.4	6.0				R010	—	
3	P1 土師器環	口～体	—	15.0	—				R011	—	
4	P1 土師器環	底部	—	—	5.6				R018	—	
5	堆積土 上層	土師器環	2/5	4.0	15.6	6.2	外:ロクロナデ、にぶい黄澄(10YR6/4)、底:回転条切り、内:ロクロナデ、にぶい黄澄(10YR7/3)			R012	—
6	炭化物層 上層	土師器環	3/5	5.1	13.4	5.4	外:ロクロナデ、にぶい黄澄(7.5YR7/4)、底:回転条切り、内:ロクロナデ、ミガキ・黒色處理、黒(10W2/1)			R002	4
7	カマド 土師器環	底部	—	—	9.7		外:ロクロナデ、ヘラケズリ、灰黄褐色(10YR6/2)、底:ケズリか、内:ロクロナデ、にぶい縫(7.5YR2/4)			R015	—
8	カマド 堆積土	土師器環	口～体	—	14.2	—	外:ロクロナデ、にぶい縫(7.5YR6/6)～にぬい縫(7.5YR7/4)、内:マメツ、縫(2.5YR6/6)			R020	—
9	カマド 内 須恵器環	底部	—	—	16.6		外:平行タタキ→ヘラケズリ、暗灰(N3/3)～灰(N4/4)、底:ケズリか、内:横ナデ、灰(N5/4)			R034	—

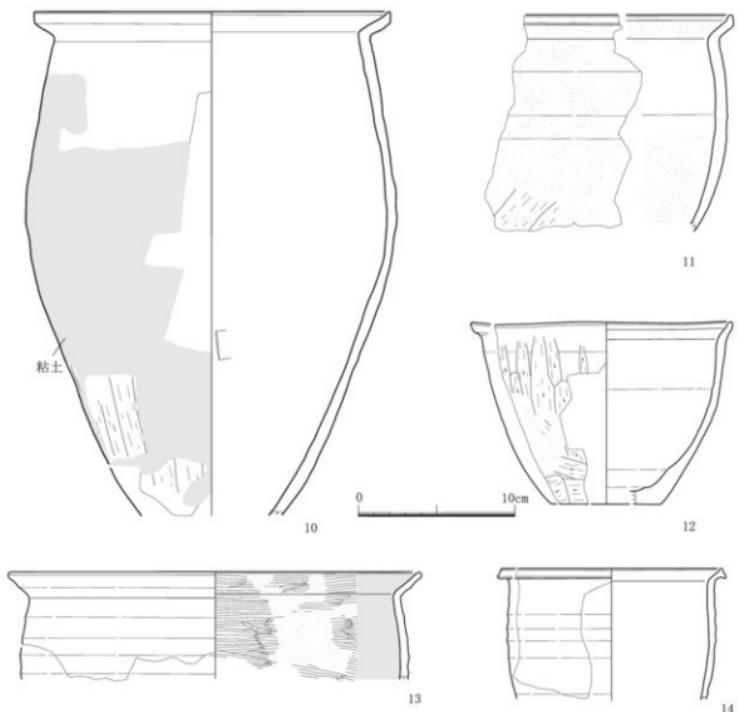
第10図 5号住居跡出土遺物（1）

隅丸方形から隅丸長方形である。P 1～3 で柱抜き取り痕跡あるいは切り取り痕跡を確認し、P 2 で径0.22m の柱痕跡を確認した。

【貯蔵穴状ピット】カマド左側に位置する。楕円形。南北0.80m、東西0.45m、深さ0.21m。底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

【ピット】カマド前面、竪穴中央南側よりで確認した。南北0.94m、東西0.40～0.80mの楕円形で深さは0.18m。底面は平坦で壁はやや急に立ちあがる。

【特記事項】初期堆積が進んだ段階でカマド周辺には薄い炭化物層と焼土が南北約1.9m、東西1.6mの範囲で分布しており、炭化物層上面で完形の土師器環を伏せた状態で確認できた。また、カ

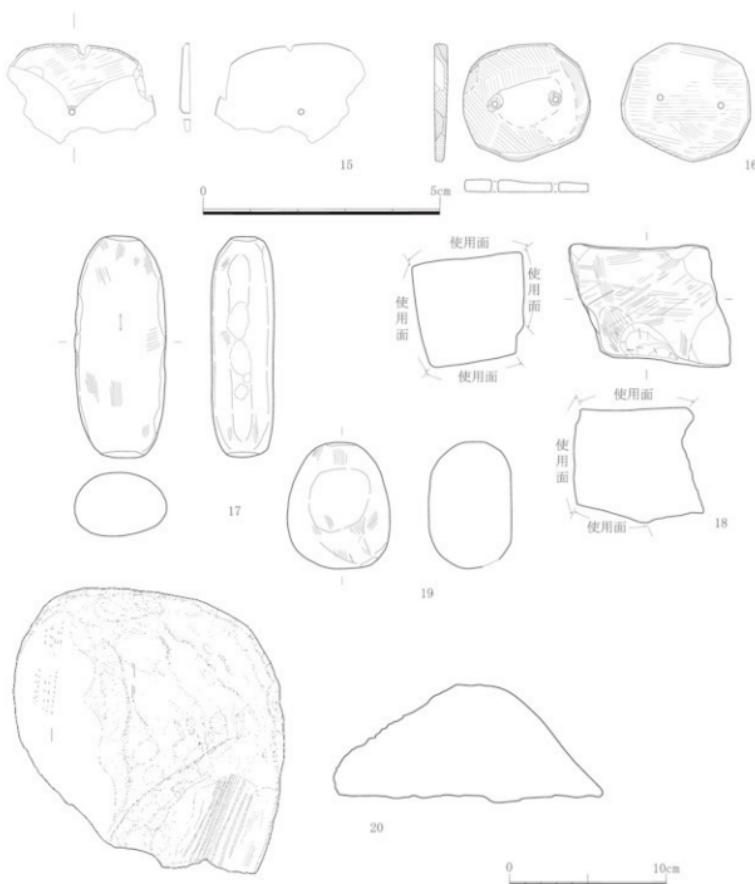


No.	層位	遺物名	残存	幅	口径	底径	特	概	登録	回収
10	カマド 崩落土上	土師器甕	1/2	—	22.4	—	外：ロクロナデ、ヘラケズリ、粘土貼付。にぶい黄粒(10y7/4~7/2)、内：マメツ (ロクロナデ、ヘラナデか)、にぶい粒(7.5yR7/4)	R025	4	
11	カマド	土師器甕	口～体	—	—	—	外：ロクロナデ、ヘラケズリ、マメツ、にぶい粒(7.5yR7/3)	R022	—	
12	カマド 縄繩土	土師器甕	1/5	11.6	16.4	6.8	外：ロクロナデ、ヘラケズリ、灰白(10yR8/2)、内：ロクロナデ、灰白(10yR8/1)	R013	—	
13	堆積土	土師器甕	口～体	—	26.0	—	外：ロクロナデ、にぶい黄粒(10yR7/3)、内：ロクロナデ、ミガキ・黒色處理、墨 (N1.7/1)	R014	—	
14	堆積土	土師器甕	口～体	—	13.8	—	外：ロクロナデ、浅黄粒(7.5yR8/3)、内：ロクロナデ、にぶい粒(7.5yR8/3)	R023	—	

第11図 5号住跡出土遺物（2）

マドでは南側側壁の外側が火災をうけ変色しているとともに、北側側壁先端付近でカマド天部崩落土上に土師器甕が置かれていることを確認した。これらのことから、住居廃絶後、初期堆積が進んだ段階でカマド周辺において火を用いた祭祀が行われたものと考えられる。

II. 四ツ堆遺跡



No.	層位	遺物名	特徴	登録	図版
15	堆積土	石製模造品	大きさ：4.7、幅：3.2、厚さ：0.3、重さ：3.3g、粘板岩、裏面欠損、表面に細かい擦痕、穿孔時の割れ、穿孔方向は不規則。	R046	4
16	堆積土	石製模造品	大きさ：3.9、幅：3.6、厚さ：0.4、重さ：9.3g、粘板岩、細かい擦痕、穿孔時の割れ、穿孔方向は1方向。	R045	4
17	堆積土	磁 石	大きさ：14.0、幅：5.8、厚さ：4.0、重さ：487.7g、側面のごく一部を除き、全面を使用	R043	4
18	カマド 堆積土	磁 石	大きさ：10.1、幅：7.0、厚さ：8.0、重さ：859.6g、6面のうち5面を使用	R044	4
19	堆積土	磁 石	大きさ：8.1、幅：6.5、厚さ：5.2、重さ：447.6g、3面を使用	R041	—
20	カマド 堆積土	磁 石	大きさ：18.3、幅：17.2、厚さ：7.3、砂岩、2面を使用し、擦痕が観察できる	R042	4

第12図 5号住居跡出土遺物（3）

〔出土遺物〕 堆積土より土師器壺、高台壺、甕、鉢、須恵器壺、壺、甕、長胴甕、石製品（砥石、石製模造品）、鐵製品（刀子）が出土。土師器壺は製作にロクロを用いたもので内面はヘラミガキ・黒色処理が行われ、底部切り離しは回転糸切りによる。甕は製作にロクロを用いたものと用いないものがあり、用いないものの口縁部形態は丸いものと四角のものがある。須恵器壺では底部切り離しが回転糸切りである。甕体部は平行タキやケズリが行われる。また、土師器長胴甕の調整と類似した須恵器質の体部破片が1点ある。カマド周辺の焼土、炭化物層からは土師器壺、甕が出土。カマド内からは土師器壺、甕、須恵器壺の小片、ナデ調整された粘土塊が出土。カマド天井構築土からは土師器壺、甕、鉢、須恵器壺、石製品（砥石）が出土し、土師器の器面は熱により摩滅が著しい。貯蔵穴状ピットからは土師器の破片、P1抜き取り痕から土師器壺、また、掘り方から土師器と須恵器の小破片が若干出土している。

#### （2）土坑と出土遺物

##### 3号土坑

〔位置〕 I区中央付近。

〔確認面〕 III層上面。

〔重複〕 3号土坑→ピット

〔平面形〕 段丸長方形。

〔規模〕 南北0.73m、東西0.50m。

〔層位〕 大別2層。層Na2は炭化物のみの單層で機能時のもの。層厚6cm。

〔壁〕 III層、0.22m残存、底面から垂直に立ち上がる。炭化物層より上部では全体に火熱でより赤変し硬化する。厚さ3cm。

〔底面〕 掘り方埋土を底とする。平坦。掘り方埋土は厚さ0.12mで底面は凹凸がある。

〔出土遺物〕 1層より須恵器甕体部破片、土師器小破片が出土した。

##### 4号土坑

〔位置〕 I区中央付近。

〔確認面〕 III層上面、1住堆積土上面。

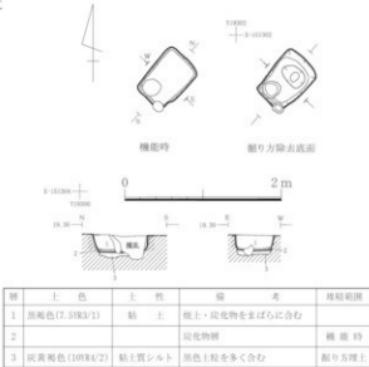
〔重複〕 1号住居→4号土坑。

〔規模〕 不整円形。

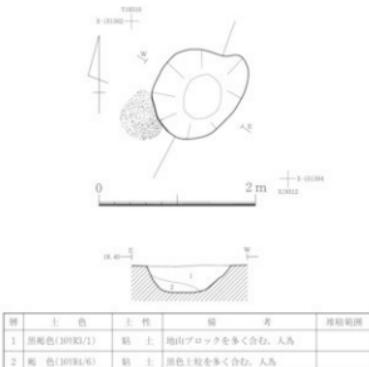
〔平面形〕 南北1.35m、東西1.05m。

〔層位〕 大別1層。人為堆積。

〔壁〕 III層及び1号住居堆積土、0.33m残存、底面から急に立ち上がる。



第13図 3号土坑



第14図 4号土坑

## II. 四ツ塙遺跡

〔底面〕 III層。ほぼ平坦。

〔出土遺物〕 摧滅した土師器壺、甕と須恵器甕の小破片が出土した。

### 6号土坑

〔位置〕 I区中央付近。

〔確認面〕 III層、5号住居堆積土上面。

〔重複〕 5号住居→6号土坑。

〔平面形〕 不整円形。

〔規模〕 南北1.05m、東西1.35m

〔層位〕 大別2層、いずれも自然堆積。

〔壁〕 III層及び5号住居堆積土、0.60m残存、底面から急に立ち上がるが、中程は崩落している。

〔底面〕 III層。ほぼ平坦。

〔出土遺物〕 土師器壺、甕、須恵器壺が出土。

### 8号土坑

〔位置〕 素掘り側溝地点（南西隅付近）の立会いで確認。断面観察のみを行なった。

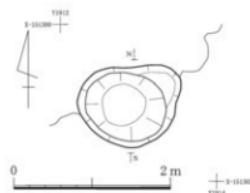
〔確認面〕 III層上面。

〔重複〕 なし。

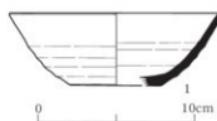
〔平面形〕 不明。

〔規模〕 東西2.3m。

〔層位〕 大別3層。1層は自然堆積、2層は地山土や黒色土を多く含むことから人為堆積の可能性がある。3層は焼土粒や炭化物を含

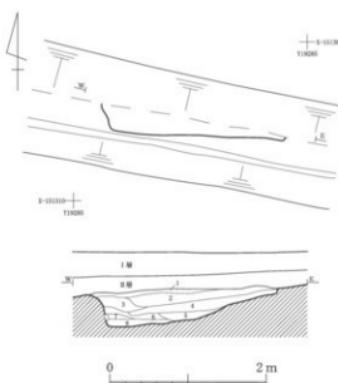


層	上色	土性	備考	堆積範囲
1	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土	地山段・土粒・炭化物多く含む	大別1層
2	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	細かい地山粒を多く含む	
3	褐灰色(10YR4/1)	粘土	細面をばらに、炭化物を若干含む	
4	黒褐色(10YR3/6)	粘土質シルト		
5	黄褐色(10YR5/6)	粘土	黒色土を若干含む、厚層土	
6	黒褐色(10YR3/1)	粘土		
7	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土	地山土を含む、上部に焼土を含む	大別2層



No.	層位	遺物名	特徴	登録
1	堆積土	須恵器環	残存: 1/3、深高4.6、口径13.5、底径5.8、外: ロクロナゲ、内: ロクロナゲ、底白(10YR7/1)、底: 回転系切り、内: ロクロナゲ、底白(10YR7/1)	0037

第15図 6号土坑と出土遺物



層	上色	土性	備考	堆積範囲
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	細かい地山粒を若干含む	大別1層
2	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	細かい地山粒を多く、炭化物を若干含む	
3	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土	地山粒が多く、地土粒を若干含む	
4	灰褐色(10YR4/3)	粘土	地山段・ブロック、黒色土粒を多く含む、人為か。	
5	黒褐色(10YR3/1)	粘土	細かい地山粒、黒色土粒を多く、黒土段・炭化物をまばらに含む	
6	暗褐色(10YR3/3)	粘土	地山小ブロック、黒色土段、下部に炭化物を含む	
7	暗褐色(10YR3/2)	粘土	地土・炭化物をまばらに含む	大別3層
8	灰褐色(10YR5/1)	粘土	黒色土粒をまばらに含む	

第16図 8号土坑

む機能時のものである。

【壁】Ⅲ層、0.43m残存、西側ではほぼ垂直に立ち上がる。

【底面】Ⅲ層。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

### (3) 溝跡と出土遺物

#### 7号溝跡

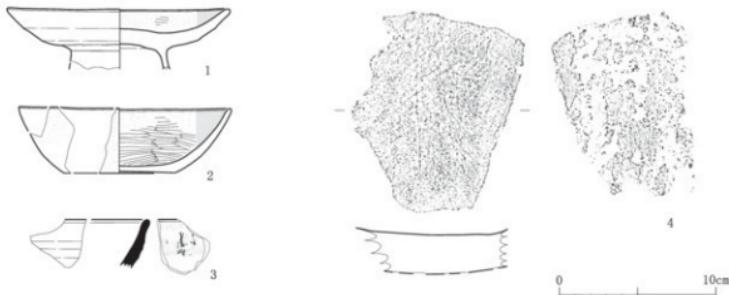
I区中央付近とII区西側のⅢ層、1号住居跡堆積土上面で検出した。1号住居跡より新しい。北側に21.5m延び、西側にはほぼ直角に折れ曲がり2m分を確認。西側へさらに延びる。上幅1.3m、深さ0.15mで底面は皿状で壁はやや急に立ち上がる。堆積土はⅡ層と類似することから近年の溝である。遺物は土師器壺、甕、鉢、須恵器壺、甕、鉄製品（棒状の不明製品）が出土しており、全体に磨滅がする。

#### (4) ピット

I区の中央から西側で径0.2~1.1mほどの落ち込みを約40個確認した。断面の形態は①U形、②箱形、③皿形、④底面に凹凸があるものの4種類である。堆積土は細かい地山粒を含みI層に類似しており、I層上面より落ち込むことが判明した。底面に凹凸があるものが多いことや堆積土の状況から作物の根などによる自然的な要因と考えられる。ピットからは土師器、須恵器の破片が出土しており、土師器では磨滅しているものが多い。

#### (5) 基本層序出土遺物

表土より須恵器、土師器、瓦、磁器が出土した。また、II層では特に2号住居跡付近で多くの遺物が出土しており、耕作の際、2号住居跡より巻き上げられた可能性が考えられる。ここでは器形の判明する遺物について図示する。



No.	層	遺物名	残存	高さ	口径	底径	特	微	登録	回収
1	Ⅲ層	土師器高台壺	高台 欠損	-	14.0	-	外：ロクロナギ、マメツ、灰黄褐色(10B6/2), 裂部：不明→ロクロナギ、内：ロクロナギ、ミカキ、黒色地斑、黒(10B2/1)		8004	4
2	Ⅲ層	土師器壺	3/5	4.1	13.4	7.0	外：ロクロナギ、マメツ、浅黃褐色(10B8/4), 裂部：回転系切口、内：ロクロナギ、ミカキ、黒色地斑、黒(10B2/1)		8003	-
3	複数層	須恵器壺	破片	-	-	-	外：ロクロナギ、灰(55/~7, 56/1), 内：ロクロナギ、マメツ、墨痕、灰(7.53/1)		8040	-
4	表土	平瓦	破片	-	-	-	内面：模倣泥、暗灰(X3/), 凸面：ナマか、ハクリ著しい、黒(02/)		8008	-

第17図 基本層序出土遺物

## 5. 考 察

### (1) 出土遺物について

各遺構から出土した遺物は少数であることから、各遺構の年代について個別に検討する。

#### ① 1号住居跡

床面や掘り方より製作にロクロを用いた土師器壺、甕、須恵器壺などが出土しているがいずれも小片で全体の器形がわかるものではなく、詳細な年代は検討できない。重複関係より5号住居跡より古い9世紀代のものである。

#### ② 2号住居跡

##### 【床面出土遺物】

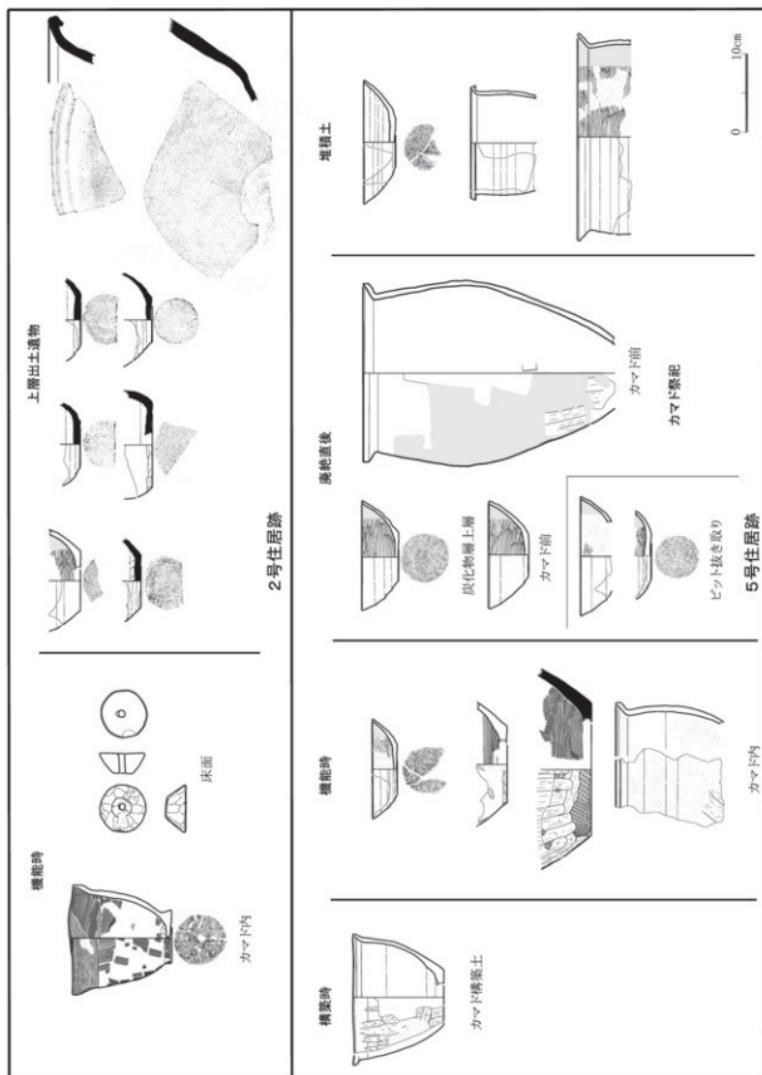
床面及びカマド底面から土師器甕、土製品、陶製品が出土している。これらは出土状況から住居機能時から廃絶時前後の遺物とすることができる、2号住居跡の年代決定資料となるものであるが、年代を検討できる資料は土師器甕のみである。

土師器甕は製作にロクロを用いない小型のものである。調整をみると外側はハケメ、内側はハケメ、横ナデがおこなわれるものである。この土師器は器形が特徴的である。口唇部の断面形が四角形であること、口縁部が屈曲し稜を持つこと、底部が四角形で内面見込みは丸みをもつという特徴を持つもので東北地方北部の土師器の特徴と共通している。宮城県内では石巻市河南町閔ノ入遺跡（註1）で出土しており、器種組成から8世紀前半のものと考えられている。四ツ壇遺跡2号住居跡では土師器甕1点であり、そのほかの器種に欠落があり、検討することができないことからおよそ8世紀代のものと考える。

陶製品は2点ある。粘土を四角形にし、指により押さえて成形を行い、部分的にナデ調整が確認できる。一面（第8図のうち調整を3面、断面を2面図示したうち中央のもの）でははある程度平坦な面を作り出しており、他の面では指圧痕が明瞭で凹凸がある。底面は平坦で何らかの圧痕がある。須恵器質に焼成されている。焼成の状況や胎土、色調から田尻町木戸窯跡（註2）で焼成された窯道具（焼き台など）の可能性を考えたが、木戸窯では類似する資料は出土していないことを宮城県多賀城跡調査研究所天野順陽氏よりご教授いただいた。具体的な使用方法も器面に火を受けた痕跡がないことから判然としないが、焼土が集中して分布する床面付近で確認していることから床面上で作業を行なう際、陶製品自体をもちいて作業を行うのではなく、道具などを支える支脚など副次的に使用した可能性が考えられる。今後、資料が増加した段階で再検討を行ないたい。

##### 【上層出土遺物】

住居廃絶後、窪地となった部分に多数の土器が廃棄された状態で出土した。土師器では壺、須恵器では壺などが出土しており、破片でも赤焼き土器が含まれない。いずれも破片で全体の器形がわかるものはない。土師器壺では製作にロクロを用いたものがあり、底部切り離しは回転糸切りによるものである。須恵器壺では底部切り離しが回転糸切りの後無調整のもの（3点）と縁辺に手持ちヘラケズリ再調整が施されるもの（1点）がある。これらは体下部にふくらみをもちらしながら立ち上がる碗形に近い器形とみることができ、底径も5.8～6.4cmとほぼ同様の大きさをもつ。全体の器形がわかるものが少なく、特徴を把握しづらいが、土師器では製作にロクロを用いることから東北地方南部の土器編年では「表杉ノ入式」（註3）に該当するものである。須恵器壺では底部の切り離し



第18図 住居跡出土遺物

が回転糸切り無調整のものが主体となる。須恵器において同様の碗形という器形で回転糸切り無調整を主体にしている類例としては貞觀8年（689）の陸奥国大地震以降に多賀城復興のための瓦とともに焼成した仙台市五本松窯跡D地点B・C群出土須恵器（註4）がある。また、多賀城市山王遺跡多賀前地区第3群土器（註5）があり、9世紀後半代の年代が考えられている。多賀城周辺では9世紀前半では底部切り離しがヘラ切りが主体（註6）であり、9世紀第3四半期以降、須恵器と土師器の比率が変化し、須恵器が激減すると指摘されている（註7）。国府である多賀城より遠く離れた集落遺跡において、上記と同様の傾向であるかは今後さらに慎重に検討を行なう必要があると考えるが、製作にロクロを用いた土師器があること、須恵器が一定量含まれることから四ツ壇遺跡2号住居跡上層出土遺物の廃棄年代は10世紀までは下らない9世紀後半代と考えられる。

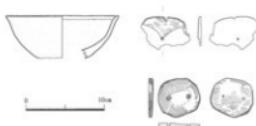
一方、須恵器では底部切り離しが回転ヘラ切りの後ヘラナデが行われ、底径が10cmを超える环がある。上記の碗形類似の器形のものとは異なるものである。須恵器甕は大型品であり、口縁部に波状文を櫛書きするものである。これらは8世紀代のものが混入した可能性がある。

### ③ 5号住居跡

5号住居跡より出土した遺物は住居廃絶後のものである堆積土出土遺物、住居廃絶直後のものであるピット抜き取り痕跡、炭化物層上面およびカマド前面出土遺物、カマド内堆積土から出土した住居機能時の遺物、カマド構築土に含まれる住居構築時の遺物に分けることができる。いずれも製作にロクロを用いた土師器を含んでいることから、東北地方南部の土器型式では「表衫ノ入式」に該当するものである。ここでは住居機能時のカマド内出土遺物、住居廃絶直後のピット抜き取り痕跡、炭化物層上面およびカマド前面出土遺物について検討する。

住居廃絶直後の土器群には土師器環、甕、須恵器がある。土師器はいずれも製作にロクロを用いるものである。环ではいずれも底部切り離しが回転糸切り無調整のもので、底部からふくらみをもつて立ち上がり、器高が4.7～5.1cmと高い碗形のものとほぼ直線的に底部から立ち上がる器高が3.3cmと低いものがある。前者では口径と底径の比率は0.42であり、後者では口径と底径の比率は0.50である。甕は長胴形の大型と中型のものがある。須恵器には壺があるが破片資料のため全体の特徴はわからない。5号住居跡の機能時から廃絶時直後の出土遺物では器種の欠落が多いため土師器環にのみ着目すると、類似するものとして多賀城市山王遺跡多賀前地区第3群土器や栗原市築館地区の佐内屋敷遺跡第II群土器（註8）を上げることができ、およそ9世紀後半代のものと考えることができる。さらに検出面で確認した灰白色火山灰層は住居がほぼ埋まりきった段階で堆積していることから、9世紀後半代でもより中葉に近い段階で5号住居跡は廃絶しているものと想定できる。

ところで5号住居跡堆積土出土遺物の中にはロクロを用いないで製作した土師器環と石製模造品2点が含まれる。土師器環は口縁部が体部上位で屈曲し外傾する器形をもつものであるが、器面の摩滅が著しく詳細な調整を把握できない。しかし、器形の特徴から東北地方内部の土器型式では「南小泉式」（註3）のものとすることはできる。石製模造品についても宮城県内の出土例をみてみると村田町新峯崎遺跡土壤出土（註9）や栗原市栗駒長者原遺跡長S3地点出土（註10）の石製模造品は共伴した土器の特徴から南小泉式期のものと考えられている。



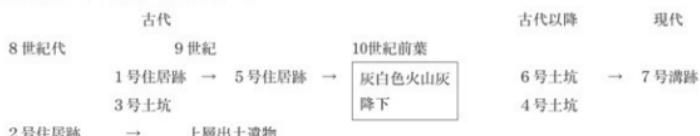
第19図 古墳時代中期の遺物

四ツ壇遺跡出土の石製模造品も出土した南小泉式の土師器と同時期のものとみて大過ないものと考えており、遺構を確認することはできなかったが1号住居跡あるいは5号住居跡に壊された南小泉式期の遺構が存在していた可能性が高い。

## (2) 遺構について

### ①重複関係

検出した遺構は重複関係や出土遺物から次のようにまとめることができる。古代では出土遺物や重複関係から3時期の変遷をもつ。



第7表 遺構の重複関係

### ②堅穴住居の構造について

それぞれの住居跡について個別に特徴をまとめる。

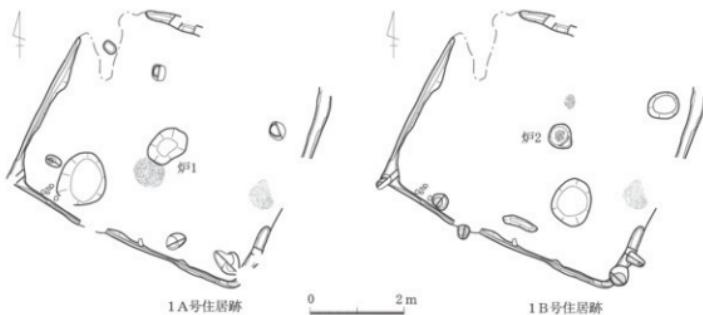
#### 【1号住居跡】

住居床面施設の重複関係、炉の造り替えから1号住居跡はA期からB期への造り替えが行われている。炉が存在すること、残存状況は悪く破片ではあるが炉本体あるいは羽口の可能性が高い土製品が出土したこと、堆積土の水洗により粒状滓を確認したことから1号住居跡内で鍛冶を行った鉄関係の工房跡と考えている。

A期は堅穴中央に位置する炉1、焼け面1、土坑3、柱穴はP7、3、11、8、13、14の6基で構成される。柱穴は南辺に3基、北辺に3基ある。このうち、土坑3、P11、8、13は掘り方除去の最中に確認しており、掘り方埋土と類似する層で埋め戻された可能性が高い。炉1は底面に炭化物、焼土を含む黒色土層が分布しており、炉本体構築にあたり防湿を目的とした掘り方である可能性が高いと考えられる。

B期では炉1周辺に貼床を行った後に炉2が掘り込まれている。底面中央には焼け面があり、鍛冶炉として用いられたものであろう。床面上には土坑1、2、溝の各施設があり、焼土、炭化物を含む黒色土が堆積する。柱穴は南壁付近に壁柱穴（P1、4、5）が構築され、堅穴内部の空間を広く利用する意図が読み取れる。なお、焼け面2、3がA期、B期どちらに伴うものかは不明である。

瀬峰地区内において堅穴内部で鍛冶を行っているものとして桃生田前遺跡4号住居跡（註11）、岩石I遺跡第1次調査堅穴遺構（註12）がある。桃生田前遺跡4号住居跡は8世紀中葉から後半、岩石I遺跡堅穴遺構は平安時代のものである。いずれも壁柱穴をもつとともに、桃生田前遺跡4号住居跡では中央に防湿のための可能性が高い土坑があることから四ツ壇遺跡1号住居跡と構造が類似している。8世紀中葉以降、鍛冶関係の工房が存在する集落があることが推定でき（註13）、今後は類例の増加をまって、工房の出現の背景について検討を加えていきたい。



第20図 1号住居跡模式図

## 【2号住居跡】

大きさが3.3~4.1mの隅丸長方形のもので、カマドは北辺の東寄りを堅穴外に掘り込んで構築している。床面上では主柱穴は確認できない。堅穴壁際には壁を押さえるための板痕跡を確認できた。

最大の特徴は北西隅が東西1.7m、南北0.80mの範囲で方形に張り出すことがあげられる。この部分でも周溝が確認できることから、他の造構が重複したものではなく住居構造として北西隅が張り出しをもつものである。具体的な機能については他の類例を確認できていないことから判然としないが、①張り出し部分を出入り口として利用した、②張り出し部分とカマドの間の部分を棚状の施設として用いた、③張り出し部分を物品の収納スペースあるいは作業スペースとして活用したなどの可能性が考えられる。②、③はいずれも住居内の空間利用についての仮説であるが、床面からは鋸鉋車や陶製品が確認できるので、堅穴内部でなんらかの作業を行っていると想定できる。特に堅穴の西側2/3のスペースは床面上になんら施設を設けておらず、東側及び南側にはピットなどの施設があることから西側のスペースで作業などを行ったものと考えることができる。その場合、周溝が途切れる北東付近を出入り口として利用したと仮定すると、この部分にはカマドやピットなどの施設が多いことから実用的ではないと考えられ、①の可能性もありうる。しかし、①と②については考古学的な事実を確認できることから、③の可能性が考えられる。今後類例の増加をまって検討していきたい。

## 【5号住居跡】

大きさが4.6mほどの隅丸方形とみられるもので、カマドは東辺の南側に構築されている。床面は中央付近が低く、壁際が高い擂鉢状となっており、床面は平坦ではないという特徴をもつ。堅穴内では主柱穴は確認できないが、各辺に2基づつ壁柱穴を確認したことからこれらが上部構造を支持する柱とみられる。壁柱穴をもつことから堅穴内のスペースを確保するための構造と考えている。

5号住居跡で注目すべきこととして、住居廃絶後壁際には土砂が堆積した段階で、カマド付近を中心に祭祀が行われていることである。カマドの南側、住居跡南隅付近は新しい土坑により破壊されるが、カマド右袖の外側（南側）が火を受けて赤変しており、この付近で火を用いていることが想

定できる。また、カマド左袖前面からカマド前ピット付近、南北1.9m、東西1.6mの範囲（第9図の点線内）で薄い炭化物層が分布していた。さらにカマド前面では左側側壁付近のカマド天井崩落土上に全体の半分ほどが残存する土師器長胴壺が外面を下にした状態で、南側の壁付近では炭化物層の上面に完形の土師器壺を伏せた状態で確認できた。これらの状況から住居廃絶後、自然堆積が進行した段階で、カマド右袖の南側、住居南東隅付近において火を用いた祭祀が行われたものとすることができる。

#### ③ 3号土坑について

3号土坑は南北0.7m、東西0.5mの圓丸長方形であり、機能時の底面に炭化物層が厚く堆積するとともに炭化物層の上部では、側壁部分のみが火熱により赤色硬化するという特徴を持つ。1層より土師器小破片が出土しているが、詳細な年代は不明である。

3号土坑と類似する特徴を持つ土坑は瀬峰地区では大境山遺跡1～3、5、7、11、17、19、20、28、41～43号小堅穴遺構（註14）、岩石I遺跡第4次調査1号土坑（註15）などがある。これらは出土遺物や堆積土の状況から古代の遺構と考えられているが、具体的な機能や性格は不明としている。

一方、同様の特徴をもつ遺構は宮城県内では多賀城市柏木遺跡SX01、02特殊遺構（註16）、福島県内では新地町武井地区製鉄遺跡群で70基、原町市金沢製鉄遺跡群では700基を越える遺構が確認されており、木炭焼成坑と考えられている（註17）。また、いわき市大平B遺跡及び大平C遺跡（註18）で検出された土坑I a類も同様の特徴を持つもので福島県内での類例や焼成実験の結果から木炭焼成遺構と考えられている。

四ツ壇遺跡3号土坑は上記の土坑と同様の特徴を持つものであり、1号住居跡において鍛冶が行われていることから、1号住居跡で鍛冶を行なうための燃料となる炭を焼成した遺構と考えられる（註19）。

#### ④ 遺跡の性格と遺構の変遷について

これまでの検討や遺構の特徴から今回調査を行った地点は古代の集落の一画であるとすることができる。検出した住居跡は同時に存在していないことから3時期の変遷を持つものと考えられ、この地点では8世紀代から集落が営まれ、灰白色火山灰が降下する以前の9世紀後半代には廃絶している。8世紀代の遺物は約220m離れた南から2番目の塚（摩利支天塚）西側付近で須恵器壺、高台壺、壺蓋が採集されており（註20）、住居は広い範囲に分布する可能性が高く、9世紀代の集落も広範囲に広がる可能性がある。なお、古墳時代中期とみられる土師器壺1点と石製模造品があることから、周辺に同時期の遺構が存在するものとみられる。集落構造の解明は今後の課題である。

## 6.まとめ

- (1) 四ツ塙遺跡は標高約20mの平坦な丘陵上に位置している。
- (2) 発掘調査の結果、8世紀～9世紀代の集落の様相を確認することができた。確認した住居跡は3棟であり、1棟が8世紀代、2棟が9世紀代であり重複関係や出土遺物から3時期の変遷がある。住居跡では鍛冶を行い住居内部のスペースを広く用いるための構造をもつ鉄関連の工房跡、北西隅が張り出す住居跡、壁柱穴をもち、床面が擂鉢状となる住居跡があるなど、それぞれの住居構造は特徴的なものである。
- (3) 濑峰地区ではこれまで明瞭ではなかった古墳時代中期ころの土師器壺、石製模造品を確認できたことから、周辺には古墳時代中期の遺構が存在している可能性が高い。

### 註

- 註1 佐藤敏幸2003「律令国家形成期の陸奥国牡鹿地方（1）—古代牡鹿地方の土器様式—」『宮城考古学』第5号、宮城県考古学会97～124頁。
- 註2 宮城県多賀城跡調査研究所2005『木戸窯跡I』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第30冊。
- 註3 氏家和典1957「東北土師器の分類とその編年」『歴史』第14輯、東北史学会、1～14頁。
- 註4 仙台市教育委員会1987『五本松窯跡 都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第99集。
- 註5 宮城県教育委員会1996『山王遺跡IV－多賀前地区考察編－』宮城県文化財調査報告書第171集。
- 註6 吾妻俊典2001「多賀城跡周辺における須恵器製作技法の変化」『古代の土器研究会第6回シンポジウム古代の土器研究－律令的土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換－』、古代の土器研究会、106～114頁。
- 註7 柳澤和明2003「京都府篠塚窯跡群から多賀城跡にもたらされた須恵器跡」『中近世土器の基礎研究XVII』、日本中世土器研究会、39～50頁。
- 註8 宮城県教育委員会1983『佐内屋敷遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ宮城県文化財調査報告書第93集。
- 註9 村田町教育委員会1991『新峯崎遺跡』村田町文化財調査報告書第9集。
- 註10 佐藤信行1995『付編（長者原遺跡昭和48年度分）』『長者原遺跡』栗駒町文化財調査報告書第3集。
- 註11 濑峰町教育委員会2000『桃生田前遺跡』『桃生田前遺跡 下富前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第19集。
- 註12 濑峰町教育委員会1977『がんげつ遺跡－平安時代の堅穴道構－』瀬峰町文化財調査報告書第1集。
- 註13 濑峰町教育委員会が2005年度に農道拡幅に伴い発掘調査を実施した四ツ塙原遺跡では炉本体を持つ住居跡、床面中央に焼け面をもつ住居跡を確認している。また、1996年度に実施した民生病院裏遺跡2次調査でも鍛冶を行っている住居跡1棟を確認している。
- 註14 濑峰町教育委員会1983『大境山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第4集。
- 註15 濑峰町教育委員会2004『岩石I 遺跡第4次調査』『清水山I 遺跡ほか』瀬峰町文化財調査報告書第22集。
- 註16 多賀城市埋蔵文化財センター1989『柏木遺跡I・II』多賀城市文化財調査報告書第17集。
- 註17 飯村均2005『律令国家の対蝦夷政策 相馬の製鐵遺跡群』シリーズ遺跡を学ぶ21、新泉社。
- 註18 いわき市教育文化事業団1996『大平B遺跡 大平C遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第44冊。
- 註19 なお、このような土坑で焼成された木炭が必ずしも鉄・鋳器生産用とは断定できないことや年代が不明なものが多いことから、評価については慎重な態度が必要ではある。平間亮輔1999「宮城県における律令期の鉄・鋳器生産関連遺跡」『1999年度（第6回）鉄器文化研究集会 東北地方にみる律令国家と鉄・鋳器生産』資料集、鉄器文化研究集会、38～50頁のうち39頁。
- 註20 権要照1966「宮城県瀬峰町の古代遺跡について」『瀬峰町史（全）』、瀬峰町、551～559頁と瀬峰町教育委員会2003「IV. 濑峰町大里地区で採集された遺物について」『長根遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第21集。

### III. 寺浦遺跡

#### 1. 調査に至る経緯

寺浦遺跡は瀬峰町大里字富寺浦に位置する。寺沢丘陵から南側に派生した小丘陵上、標高30m前後の丘陵頂部から斜面にかけて立地し、縄文時代の石器や古代の土師器が採集されていた。これまで瀬峰町教育委員会が確認調査や工事立会いを実施している（第1図）。

平成16年5月20日、佐々木道幸氏より「家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律」に伴う堆肥舎新築工事計画についての連絡があり、位置は寺浦遺跡の範囲内であった。事業の内容は切り土と盛土による整地を行い、堆肥舎を建設するものである。踏査したところ牧草地となり遺物は採集できること既に削平を受けている可能性が高いことを想定した。平成16年6月7日付けで協議書の提出をうけ、宮城県教育庁文化財保護課、瀬峰町教育委員会、佐々木道幸氏で協議を行い、切り土部分を中心に確認調査を実施することとした。確認調査は7月5日に実施した。盛土部分の斜面では幅1.5~2mのトレンチを3本（I~III区）、削平部分の丘陵平坦面ではトレンチを1本（IV区）設定し、丘陵平坦面北側で堅穴住居跡1棟とピット数個を確認した。住居跡は既に掘り方の一部が露出する状態であった。さらにIV区を拡張し4棟の建物跡を確認した。協議を行ったが他の地点への計画変更ができないことと遺構の残存状況が不良であることから7月6日より遺構の掘り下げと記録の作成を開始した。遺構は簡易造り方を設定し1/20の平面図、調査区は1/50の平

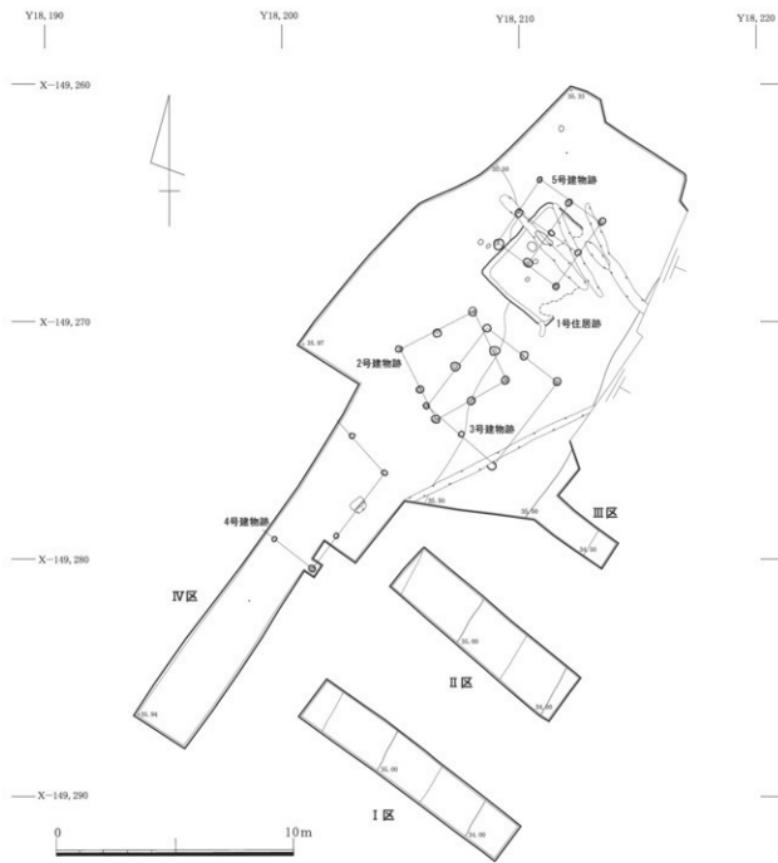


第21図 寺浦遺跡と調査区の位置

No.	事業名	調査日時	内 容	調査面積(m <sup>2</sup> )	成果など
1	下水管布設	2000.12	工事立会	71	遺物2件
2	個人住宅建設	2000.12	確認調査	98	遺出遺構なし
3	個人住宅建設	2003.5	工事立会	27	遺出遺構なし
4	堆肥舎建設造成	2004.7	確認調査	210	住居1・建物4
5	堆肥舎建設造成	2004.8	工事立会	500	遺出遺構なし

Ⅲ. 寺浦遺跡

板を用いて作成した。写真是35ミリカメラとデジタルカメラを用いた。7月15日までは各種記録作成を行い、機材を搬出して調査を終了した。引き続き、平面図や遺物の整理を行い、平成17年4月30日までに報告書作成を終了した。



第22図 遺構配置図

## 2. 基本層序

丘陵頂上部(IV区)ではI層除去後にIII層を確認したことと遺構の残存状況から昭和39年以降の草地造成により削平を受けていると想定した。調査区内の基本層は次のとおりである。

I層 黒褐色(2.5Y3/2)シルト。しまりや粘性はない。斜面では0.30m、IV区では0.10~0.25m。

調査区内での表土である。

II層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト。しまりはなく、粘性はある。地山土をまばらに含む。斜面でのみ確認でき、厚さ15cmである。流出土の可能性が高い。

III層 明黄褐色(10YR7/6)粘土。調査区内での地山である。平坦面では部分的にグライ化している。

IV層 碾層。斜面の調査区東側II層下で確認した。

## 3. 検出した遺構と遺物

検出した遺構は竪穴住居跡1棟、建物跡4棟である。

### (1) 竪穴住居跡と出土遺物

#### 1号住居跡

[位 置] IV区北側。

[確認面] III層。

[重 复] 1号住居跡→5号建物跡。

[平面形] 圓丸長方形。北東付近が削平される。

[規 模] 南北4.30m、東西3.60m。

[延べ床面積] 15.48m<sup>2</sup> (推定)。

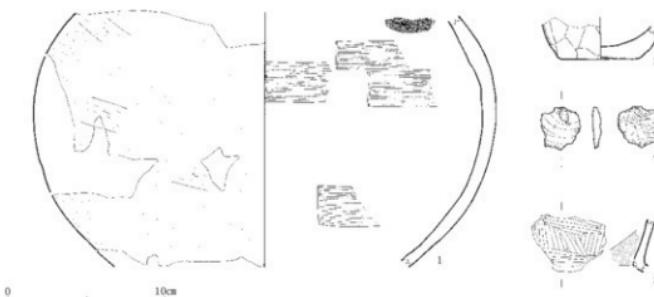
[方 位] N-45° - E (西辺)。

[層 位] 1層。南辺付近に残存する。

[壁] III層を壁。床面から垂直に立ち上がる。南西隅付近で0.05m残存。

[床 面] 挖り方を床とする。南西隅から中央付近で残存。掘り方は層厚7cmで底面は凹凸がある。

[周 溝] 認証した範囲では全周する。幅0.09~0.21m、深さ0.02~0.05mで、断面形は「U」形。自然堆積。



No.	測 定	遺物名	器種	残存	特 記	登録
1	床 面	土 壤 器	土器	全体	側部最大径: 29.6cm、外: ケズリ、内: ハナダ、厚さ: 10cm	8001
2	床面直上	土 壤 器	壺か甕	底部	底径: 1cm、外: 厚底(ケズリかナダ)、灰白色(10YR6/1)、底部: ナダか、内: 厚底、褐色(5YR6/6)	8002
3	掘り方	土 壤 器	土器	側部	外: ハラミガキ、内: 黄褐色(10YR7/3)、内: ナダ、灰黄褐色(10YR6/2)	8003
4	掘り方	石 片	石片	石の種類: 黒曜石、長さ: 2.7、幅: 2.5、厚さ: 0.5、研磨面残る、2次加工なし	8004	

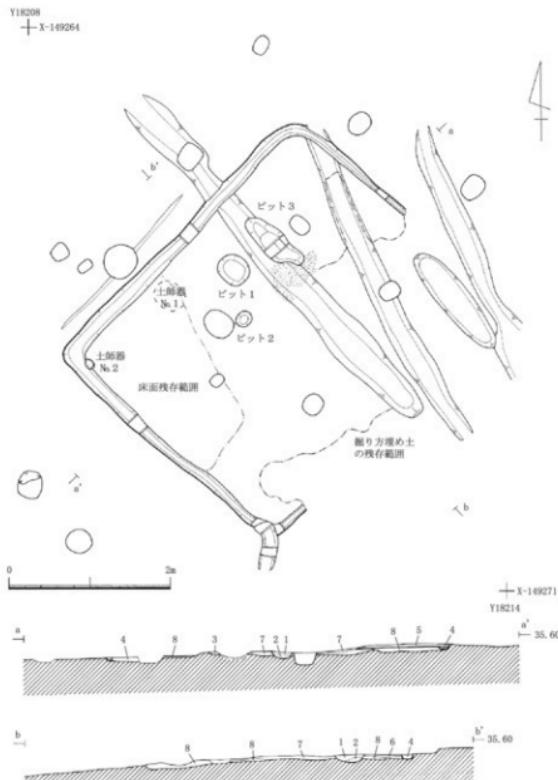
第23図 1号住居跡出土遺物

Ⅲ. 寺浦遺跡

[焼け面] 床面中央西側付近に位置する。径0.46～0.60m、厚さ0.05m。不正形。掘り込みは確認できない。

[ピット] 3個確認した。重複関係から住居跡より新しいものである。

[出土遺物] 堆積土と床面より土器（非ロクロ）、掘り方より土器、黒曜石製剝片が出土した。



No.	土色	土性	含有物等	堆積範囲
1	褐色(10YR4/1)	シルル	ト 地山小ブロック、黒褐色シルトを多く、炭化物を下部にまばらに含む。	ピット1,2
2	黒色(10K2/1)	シルル	ト 地山小ブロックをまばらに、炭化物を下部に多く含む。	ピット3
3	黄褐色(2.5Y4/1)	シルル	ト 下部に炭化物をまばらに含む。	堆積土
4	灰黃褐色(10B4/2)	シルル	ト 細かい地山小粒をまばらに含む。	同上
5	にじみ黄褐色(10YR4/3)	シルル	ト 地山小ブロックをまばらに含む。	同上
6	黒褐色(10K3/1)	粘土質シルト	ト 地山粒をまばらに、炭化物、灰白色シルト粒を若干含む。西側にのみ分布。	掘り方理上
7	褐色(10Y4/1)	シルル	ト 灰白色シルトを若干含む。	
8	褐色(10Y4/1)	シルル	ト 地山ブロック、黒褐色シルトを多く含む。	

第24図 1号住居跡

## (2) 建物跡と出土遺物

## 2号建物跡

[位 置] IV区中央付近。

[確認面] III層。

[重複] 直接の重複はないが3号建物跡とは同時に存在できない。

[構造] 東西2間、南北2間。側柱建物跡。

[規模] 東西3.51m(西辺)、南北3.35m(南辺)。

[方位] N-63°-E(西辺)。

[延べ床面積] 11.75m<sup>2</sup>。

[柱穴] 8ヶ所確認。隅丸方形。径0.24~0.42m、深さ0.18~0.30m。埋土は地山粒を含む褐色シルト。

[柱痕跡] 8ヶ所確認。円形から楕円形。径0.12~0.23m。深さ0.18~0.30m。堆積土は細かい地山粒を若干含む黄灰色粘土~黒褐色粘土。

[出土遺物] P5より土師器甕1点が出土。

## 3号建物跡

[位 置] IV区中央付近。

[確認面] III層。

[重複] 直接の重複はないが2号建物跡とは同時に存在できない。

[構造] 南北1間、東西2間。側柱建物跡。

[規模] 南北4.15m(西辺)、東西3.79m(南辺)。

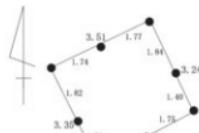
[方位] N-38°-E(西辺)。

[延べ床面積] 15.72m<sup>2</sup>。

[柱穴] 7ヶ所確認。円形から隅丸方形。径0.24~0.38m、深さ0.12~0.29m。埋土は地山粒を含む褐色シルト。

[柱痕跡] 4ヶ所確認。円形。径0.14~0.18m。深さ0.13~0.29m。堆積土は細かい地山粒を含む黄灰色粘土。

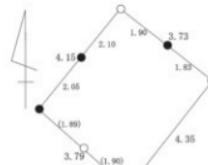
[出土遺物] 遺物は出土していない。



第25図 2号建物跡模式図

	柱穴 (m)	柱痕跡 (m)
	平面形 長軸 短軸 深さ	平面形 長軸 短軸 深さ
1	隅丸長方形 0.39 0.24 0.25	円形 0.12 0.12 0.25
2	円形 0.34 0.33 0.30	円形 0.16 0.16 0.30
3	円形 0.35 0.30 0.18	だ円形 0.17 0.12 0.18
4	楕円形 0.40 0.36 0.26	円形 0.16 0.15 0.26
5	円形 0.31 0.30 0.22	だ円形 0.16 0.14 0.22
6	円形 0.31 0.31 0.23	だ円形 0.21 0.16 0.23
7	円形 0.42 0.41 0.27	だ円形 0.23 0.13 0.27
8	円形 0.30 0.25 0.30	だ円形 0.21 0.16 0.30

第8表 柱穴の規模



第26図 3号建物跡模式図

	柱穴 (m)	柱痕跡 (m)
	平面形 長軸 短軸 深さ	平面形 長軸 短軸 深さ
1	円形 0.30 0.30 0.19	— — —
2	円形 0.34 0.31 0.21	円形 0.16 0.15 0.21
3	円形 0.32 0.31 0.20	円形 0.14 0.14 0.20
4	— — —	— — —
5	円形 0.31 (0.27) 0.12	— — —
6	隅丸長方形 0.20 0.20 0.03	— — —
7	隅丸長方形 0.24 0.24 0.13	円形 0.15 0.14 0.13
8	楕円形 0.38 0.35 0.29	隅丸方形 0.18 0.16 0.29

第9表 柱穴の規模

## 4号建物跡

[位置] IV区南側。

[確認面] III層。

[重複] なし。

[構造] 枝行3間、梁行1間以上。側柱。南北棟。

[規模] 枝行5.0m(南辺)、梁行2.1m以上(北辺)。

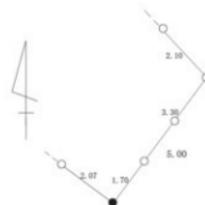
[方位] N-38° -E(東辺)。

[柱穴] 5ヶ所確認。隅丸方形から円形。径0.16

~0.30m、深さ0.10~0.25m。埋土は地山粒を含む灰黄褐色シルト~褐灰色粘土質シルト。

[柱痕跡] 1ヶ所確認。円形。径0.15m。深さ0.25m。堆積土は褐灰色粘土質シルト。

[出土遺物] P 6より土師器甕口縁部片が1点出土。



第27図 4号建物跡模式図

## 5号建物跡

[位置] IV区北側。

[確認面] III層、1号住居堆積土。

[重複] 1号住居跡→5号建物跡。

[構造] 枝行2間、梁行2間。総柱建物跡。

[規模] 枝行3.29m(東辺)、梁行3.15m(北辺)。

[方位] N-35° -E(西辺)。

[延べ床面積] 10.36m<sup>2</sup>。

[柱穴] 6ヶ所確認。円形から隅丸方形。径0.17

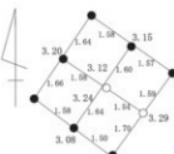
~0.48m、深さ0.07~0.45m。埋土は地山粒を含む灰黄褐色シルト。

[柱痕跡] 4ヶ所確認。円形。径0.15~0.19m。

深さ0.11~0.45m。堆積土は地山粒を若干含む黃灰色シルト。

[出土遺物] P 3柱痕跡とP 7掘り方より弥生土器の可能性のあるもの、P 3柱痕跡、P 4掘り方、P 9より土師器が1点ずつ出土した。いずれも破片である。

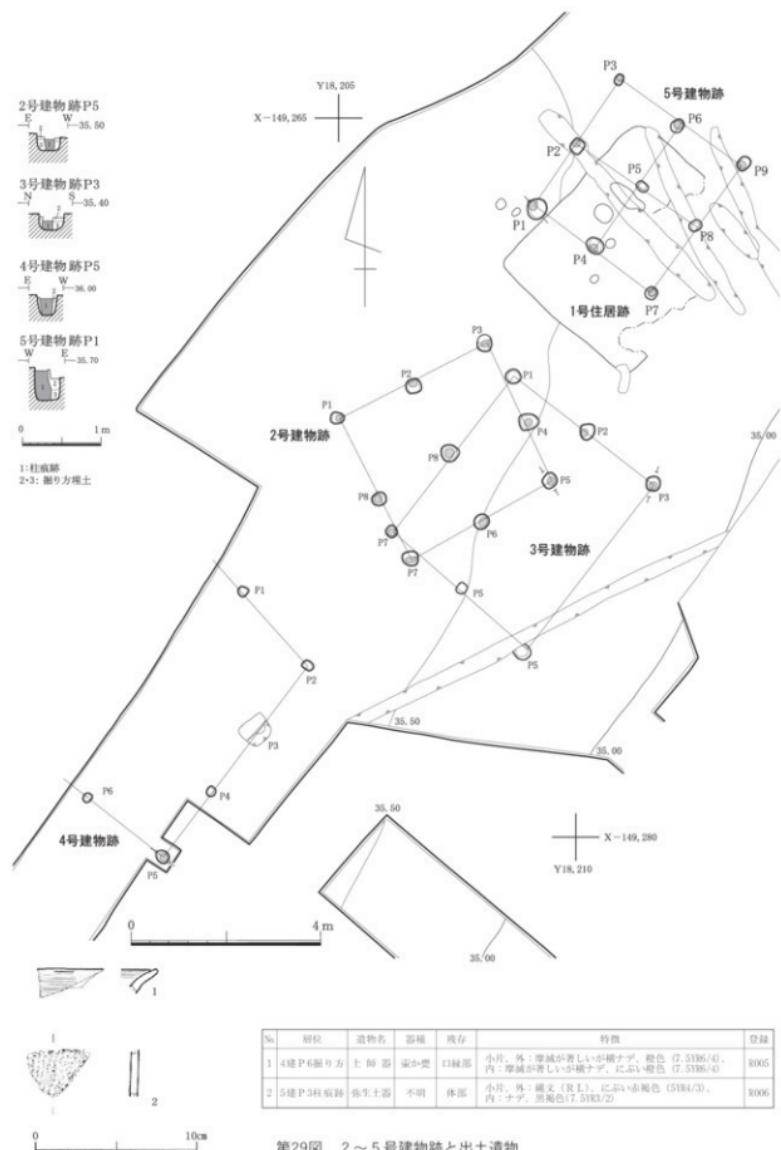
第10表 柱穴の規格



第28図 5号建物跡模式図

柱穴 (m)	柱の寸法 (m)				柱の寸法 (m)			
	平面形	長軸	短軸	深さ	平面形	長軸	短軸	深さ
1 円形	0.48	0.38	0.45	円形	0.19	0.17	0.45	—
2 圓丸方形	0.33	0.27	0.13	円形	0.15	0.15	0.13	—
3 圓丸方形	0.24	0.17	0.35	円形	0.16	0.15	0.35	—
4 楕円形	0.48	0.32	0.16	円形	0.19	0.16	0.11	—
5 圓丸方形	0.25	0.19	0.07	—	—	—	—	—
6 楕円形	0.31	0.25	0.17	円形	0.19	0.18	0.17	—
7 円形	0.26	0.26	0.14	円形	0.18	0.18	0.14	—
8 圓丸方形	0.26	0.21	0.10	—	—	—	—	—
9 楕円形	0.33	0.25	0.25	円形	0.16	0.15	0.25	—

第11表 柱穴の規格



第29図 2～5号建物跡と出土遺物

## 4. 考察

### (1) 出土遺物について

出土した遺物は土器、石器があり、総量は天箱約1箱分である。

#### ①土器

弥生土器の可能性があるもの、土師器、須恵器が出土し、土師器が多数を占める。いずれも破片である。土師器を中心に特徴と年代について考える。

#### 【弥生土器の可能性のあるもの】

2点ある。条の間隔が狭いことから弥生土器とした。体部にL R縄文が横位回転される。時期は特徴的な部位や明確な特徴がなく不明である。

#### 【土師器】

1号住居跡を中心に土師器が出土した。器種には甕・壺などがあるが、いずれも破片で器種が不明なものが多い。図示した遺物では第23図1が球胴型の壺体部で外面は火ハネにより摩滅しているがケズリ、内面はハケメである。2は甕底部で底部中央が凹む。3は頭部が直立する壺で外面はミガキ、内面はヘラナデである。

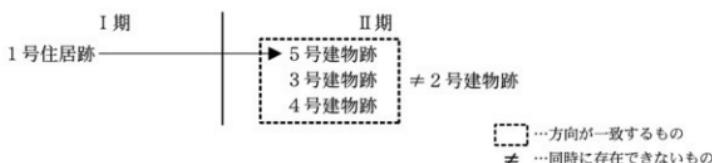
図示資料と破片資料はロクロを用いて製作されておらず、内面黒色処理されない特徴をもつ。器形も古代のものとは異なる。このことから出土した土師器は古代以前のものであり、特徴がわかるものがなく器種の欠落もあり断定できないが、大境山遺跡第1土器群（註1）に類似したものがあるので古墳時代前期頃に位置づけられると考えている。

#### ②石器

黒曜石製の剥片が1点ある（第4図5）。石には白色の筋がいくつも確認できる。栗原市南部ではこれまで瀬峰地区の大境山遺跡、袋沢遺跡（註2）、泉谷遺跡（註3）、横森遺跡隣接地（註4）や高清水地区の大寺遺跡（註5）などで黒曜石製石器が出土しているが、横森遺跡隣接地を除く4遺跡では寺浦遺跡出土のものと同様の特徴を持つ。大境山遺跡9号住居跡出土の黒曜石は分析により加美町（旧宮崎町）湯の倉産（註6）と考えられており、寺浦遺跡の黒曜石も湯の倉産のものと考えている。

### (2) 遺構について

重複関係や方向などから遺構の変遷は次のとおりである。



第12表 遺構の重複関係

### ①住居跡

堅穴住居跡を1棟確認した。ここでは、住居跡の立地と特徴をまとめ、検討を加える。

**【立 地】**住居跡は標高約35mの丘陵上にある。ここは東西に伸びる丘陵から樹枝状に南側へ延びる最末端の丘陵が派生する付け根付近にあたり東側と西側に幅の広い谷がはいる。昭和39年以降の草地造成により改変されたとはいえ、丘陵先端付近の平坦面に比べると付け根付近の平坦面は幅が狭い。住居跡はこの丘陵尾根付け根付近の幅の狭い平坦面に立地する。

**【規 模】**住居跡は南北4.30m、東西3.60mで方形を基調とする。瀬峰地区で確認している中では中規模ではあり、その中ではやや小型のものである。

**【床面施設】**確認した住居跡の施設は地床炉の可能性がある焼け面と周溝である。焼け面は搅乱などの影響により掘り込みは確認できない。焼けた範囲の厚さ2～5cmであるが、残存する掘り方より深いことから、本来土坑状に掘り窪めていた可能性もある。

周溝は確認した範囲で全周する。板材の痕跡は確認できることと周溝底面は西側が高く、東側に傾斜し、地形の傾斜とほぼ一致することから排水を目的としたものと考えられる。

主柱穴は確認できない。床面上でピット3基を確認した。住居堆積土が残存せず、掘り込み面は確認できないが、3基ともに底面付近に炭化物を含むとともに堆積土が類似するので同時期の可能性が高く、そのうちの1基は焼け面を壊して構築されていることから住居跡より新しいものである。

**【遺物の出土状況】**遺物は住居堆積土（廃絶後）、床面（機能時～廃絶前後）、掘り方（構築時）から出土している。西辺中央付近の床面から出土した土師器甕（No.1）はつぶれた状況で出土したものである。また、南西隅付近出土の土師器底部（No.2）は周溝堆積土上から床面に位置する。床面よりやや浮いている。これらは住居機能時から廃絶前後の遺物とできる。

掘り方より出土した住居構築時の遺物はいずれも小片で接合せず、全体が判明するものがない。住居機能時から廃絶時と構築時の遺物はハケメなど調整が類似し、ほぼ同時期のものと考えている。また、黒曜石製の剥片も掘り方から出土している。掘り方内にこのような遺物が含まれることから周辺に1号住居跡に先行する遺構があった可能性が考えられる。

**【まとめ】**丘陵平坦面上に立地し、地床炉を持つ住居跡は瀬峰地区内では大境山遺跡（註1）に類例がある。ここでは住居11棟が尾根上に近接して分布する。重複関係はないが、数棟から構成される小集落が複数回形成されたと推定されている。構造をみると大境山遺跡の古墳時代前期の住居跡は方形のものと不整形のものがある。形態は異なるものもあるが規模はほぼ同一である。また、主柱穴が確認できないものが多く、周溝や貯蔵穴状ピットは検出されていない。

寺浦遺跡1号住居跡でカマドを確認できないことからカマド普及以前のものの可能性が高い。また、立地や構造、出土遺物は大境山遺跡の古墳時代前期の住居跡と類似している。このことから1号住居跡はカマドが出現する以前の古墳時代前期ころに位置づけられると考えている。

### ②掘立柱建物跡

4棟確認した。柱穴の規模、堆積土などより次の2群に分類できる。

**【A群】**柱間が約1.8mで、堆積土は褐灰色シルトのもの。

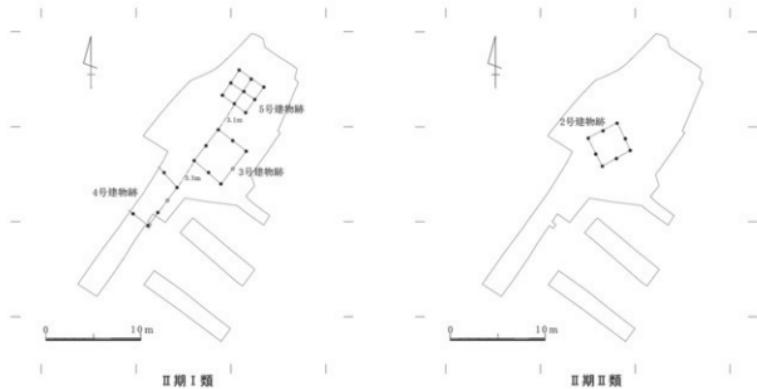
【B群】梁行の柱間が約2.1mで、柱穴はA群よりやや規模が小さい。堆積土は黄灰色シルトのもの。

A群のうち5号建物跡は総柱建物跡で、総長3.5m前後の小型のものである。1号住居跡より新しいことと柱穴の規模が桃生田前遺跡25号建物跡（註7）や下富前遺跡91号建物跡（註8）などと類似することから古代の建物である可能性がある。さらに1点ではあるが1号住居跡より新しいピット3から古代の須恵器が出土していることからも古代の可能性が高いものと考えられる。また、2・3号建物跡は桁行2間、梁行2間の側柱建物跡であり、5号建物跡と柱穴の規模や堆積土が類似することから、同時期か近接した時期のものと想定している。なお、南側柱列は北側と比較すると浅いが、削平の影響によるものであろう。

B群はA群の柱穴と比較すると小規模で、柱痕跡を確認できるものが少なく、さらに堆積土も異なる。柱間は桁行では同一であるが、梁行でやや広い。ただし、柱穴の規模が異なることは削平の影響を考えることもできる。

方向をみるとA群では北で約60° 東にふれるA①群（2号建物跡）と北で約35° 東にふれるA②群（3・5号建物跡）がある。B群は後者と方向が同じである。さらにA②群とB群は柱筋がそろうとともに北から5号建物跡と3号建物跡が3.1m、3号建物跡と4号建物跡が3.3mとほぼ同一の間隔で分布することから同時に存在したもので規格性が高い配置を持つものと考えている。

このことから調査区内で検出した建物跡はI類（A②群（3・5号建物跡）とB群（4号建物跡））とII類（A①群、2号建物跡）の2つにわけることができ、第30図のような遺構配置をとる。2号建物跡と3号建物跡は直接の重複関係がないことから前後関係を明らかにすることはできない。しかし、柱穴の規模が類似することから短い時期の中での変遷であるとともに、総柱建物跡を含んでいることから特定の用途で使用された地区である可能性が高く、今後周辺の調査を進め検討を加える必要があると考えられる。



第30図 II期の遺構配置図

## 5. まとめ

- (1) 寺浦遺跡は標高約35mの丘陵上から斜面にかけて立地している。これまでの踏査では縄文時代の石器、古代の土師器を採集している。このことより縄文時代、古代の包蔵地として登録されていた。
- (2) 今回の調査により竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡4棟を確認した。
- (3) 竪穴住居跡は残存状況が悪く、遺物の特徴がわかる遺物が少ないため詳細な時期は不明であるが、丘陵尾根頂上部に位置し住居床面中央付近に地床がであること、出土遺物は土師器のみであり、土師器の特徴から大境山遺跡で検出した古墳時代前期の住居跡との類似性が認められる。このことから具体的な時期については言及しかねるが、古墳時代前期ころのものと考えられる。
- (4) 建物跡は重複関係より1号住居跡より新しく、古墳時代前期以降のものである。規模や形態から古代のものと考えられる。建物は直接の重複関係がないが2時期の変遷があり、3棟の建物が等間隔で南北に並ぶとともに総柱建物跡を含んでいることから倉庫など特定の用途に使われた地点であると想定される。

### 註

- 註1 濑峰町教育委員会1983『大境山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第4集、247~249頁。
- 註2 佐藤・阿部・赤沢1985「昭和59年度文化財バトロール事業報告」『瀬峰町の文化財』第4号 濑峰町教育委員会、1~13頁。
- 註3 佐藤信行1984「昭和58年度文化財バトロール事業報告」『瀬峰町の文化財』第3号、瀬峰町教育委員会、1~5頁。
- 註4 平成元年度の文化財バトロール事業の際表面採集したものである。
- 註5 佐藤信行1984『宮城県内の北海道系遺物』『宮城の研究』第1巻 清文堂、426~478頁。
- 註6 吉谷昭彦・高橋誠明2000「宮城県における続縄文系石器の意義と石材の原産地同定」『宮城考古学』第3号、宮城県考古学会、53~76頁。
- 註7 濑峰町教育委員会2000『桃生田前遺跡 下富前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第19集。
- 註8 濑峰町教育委員会2004『下富前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第23集。

## IV. 四ツ塚遺跡

### 1. 調査に至る経緯

四ツ塚遺跡は瀬峰町大里字中四ツ塙原に所在する。標高約30m前後の四ツ塙原丘陵の中央付近、丘陵頂部から南側斜面に立地する。現在、宅地、畠地として利用されている。平安時代後期のものという伝承を持つ塙3基があり、遺跡の北側に隣接して江戸時代の一宇一石経塙である諏訪原経塙（註1）が所在する。

平成3年、瀬峰町建設課より県道田尻瀬峰線拡幅工事計画に伴い、拡幅敷地に位置するビニールハウスを移転し隣接する地点に建設する計画があるとの連絡が入った。四ツ塚遺跡の範囲内であるため宮城県教育庁文化財保護課、瀬峰町教育委員会、瀬峰町葉タバコ生産組合と協議を行い、ハウス建設予定地の遺構確認調査を実施することとした。重機を用いて表土除去を行い、東側部分から土坑1基を確認したので、精査を行い、各種記録を作成した。

平成4年、宮城県建築産業振興事務所より県道田尻瀬峰線拡幅工事に伴う協議書の提出を受けた。協議地は四ツ塚遺跡の範囲内であり、遺跡に隣接する南斜面や北側の丘陵平坦面にも遺跡の範囲が伸びる可能性もあるため確認調査を実施することとした。重機を用いて掘り下げ、土坑1基を確認した。また、塙2基を調査し盛り土を確認した。精査の後各種記録を作成し調査を終了した。遺構の平面図及び断面図は1/20で記録を行い、写真撮影は35mmカメラ（カラー）を用いた（註2）。

なお、県道田尻瀬峰線改良工事計画はさらに北に延長し除館跡、旗塙遺跡とかかわりをもっていたが、平成15年度に事業中止が決定したので、これまでの調査についてまとめ報告を行なうこととした。



第31図 四ツ塚遺跡と調査区の位置

## 2. 基本層序

基本層は次のとおりである。

I層 黒褐色(10YR2/2)～暗褐色(7.5YR3/4)砂質シルト。本調査区内での表土である。

II層 黒褐色(7.5YR3/2)砂質シルト。やや固く、粘性はややある。塚調査区付近にのみ分布する旧表土である。

III層 明褐色(7.5YR5/6)～明黄褐色(10YR6/8)粘土。地山である。

## 3. 検出した遺構と遺物

検出した遺構は土坑2基、塚2基である。

遺物は出土していない。

### (1) 土坑

#### ① 土坑と出土遺物

##### 3号土坑

[位 置] 新設ハウス調査区中央南側。

[確認面] III層。

[重複] なし。

[平面形] 上面は円形。下部は隅丸方形。

[規 模] 上幅：長軸1.13m、短軸1.04m。

下幅：東西0.70m、南北0.64m。

[層 位] 大別2層、いずれも自然堆積。

[壁] III層、0.82m残存、底面から急に立ち上がる。上方は崩落のため鉢状に開く。

[底 面] III層、平坦。底面中央で杭の痕跡を1ヶ所検出。径0.1m、長さ0.30m以上。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

##### 4号土坑

[位 置] 記録がなく不明だが、県道拡幅地点の既存ハウス付近である。

[確認面] III層上面。

[重複] なし。

[平面形] 上面は円形。下幅は隅丸方形。

[規 模] 上幅：長軸1.95m、短軸1.70m。

下幅：東西1.30m、南北1.15m。

[層 位] 大別2層、いずれも自然堆積。

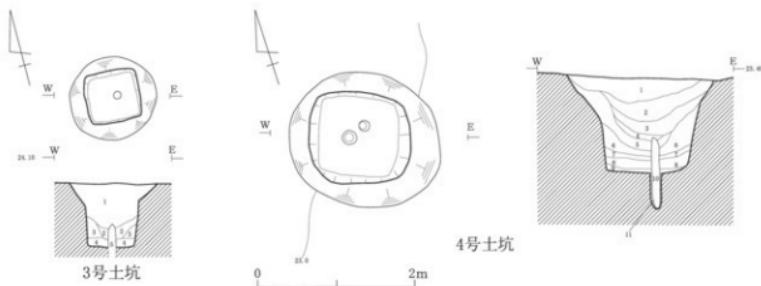


第32図 遺構配置図

[ 壁 ] III層、1.20m残存、底面から急に立ち上がる。上方は崩落のため鉢状に開く。

[ 底 面 ] III層、平坦。底面中央で杭痕跡を2ヶ所検出。杭1は径0.14m。底面からの深さ0.29m。杭2は径0.10m、長さ0.91m、底面からの深さ0.47m。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。



No.	土 色	土 性	備 考
1	黒色 (7.5YR 7/1)	砂質シルト	地山粘土を斑状に含む。黒ボク土。
2	黒褐色(5YR2/1)	砂質シルト	地山粘土を斑状に含む。
3	褐色(10YR4/4)	砂質粘土	壁崩落土か。
4	灰褐色(10YR4/2)	砂質粘土	褐色砂質粘土をブロック状に含む。
5	暗褐色 (5YR3/2)	砂質シルト	

No.	土 色	土 性	備 考
1	黒色(10YR 7/1)	砂質シルト	地山粘土を斑状に含む。
2	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山粘土をブロック状に含む。
3	黒褐色(7.5YR2/2)	砂質シルト	地山粘土をレンズ状に含む。
4	暗褐色(7.5YR3/3)	砂質シルト	地山粘土をブロック状に、多量に含む。
5	黒色(10YR 7/1)	砂質シルト	地山粘土をブロック状に含む。
6	明褐色(7.5YR5/6)	砂質粘土	少量の礫を含む。
7	褐色(7.5YR2/3)	砂質シルト	地山粘土をブロック状に含む。
8	明褐色(10YR6/6)	砂質粘土	
9	黄褐色(10YR5/6)	砂質シルト	地山粘土を斑状に含む。
10	黒褐色(10YR2/3)	粘 土	
11	明褐色(7.5YR3/4)	砂質シルト	黒褐色砂質シルトをブロック状に含む

第33図 土坑

## ② 土坑の性格について

土坑は底面に杭の痕跡をもつもので、形態、規模、堆積土の状況、類例（註3）から落とし穴遺構とみることができる。遺物は出土していないが堆積土の状況から縄文時代のものと考えられる。記録を欠くため土坑1基の詳細な位置は不明だが、写真から推定すると近接するとみられるのでケモノ道沿いに設置されたものの可能性がある。

## (2) 塚

## ① 塚と出土遺物

## 1号塚

【位置】塚調査区南側。

【盛土】黒色砂質シルト。II層上面に構築。

【平面形】隅丸長方形。

【遺物】出土していない。

【規模】東西10.5m、南北4.0m、高さ0.64m。

## 2号塚

【位置】塚調査区北側。

より搅乱層を確認した。

【平面形】隅丸方形。東側及び北側の一部は県道などにより破壊される。また、昭和50年頃に北側付近が削平の後復元されたとの話があり、調査に

【規模】東西9.0m、南北7.1m、高さ0.68m。

## ②塚の年代と性格について

【盛土】黒色砂質シルト。II層上面に構築。

【遺物】出土していない。

今回の調査で塚2基を調査した。しかし、近年まで四ツ塚遺跡内には3基の塚があり、昭和61年度の文化財バトロール時には2基はほぼ原形を保ち、1基は痕跡を残すのみであったことを確認している(註5)。この際の聞き取りでは調査区南側にある葉たばこハウス付近にも1基あったとのことである。『瀬峰町史(全)』(註4)では諏訪原経塚を含めた4基とするが、『栗原郡藤里村誌』上巻(註6)では四ツ塚と諏訪原経塚を別項目としており大正年間には諏訪原経塚を含めない4基で構成されるという認識であった可能性が高い。

次に検出した塚の特徴をまとめ、これまでの記録と比較する。

塚は方形を基調とする。規模は4~10m、高さ0.70mである。調査では旧表土上に盛土を行っていることを確認したのみで、主体部や周溝は確認されなかった。

第2表は『瀬峰町史』所収の「四ツ塚附近図」(第34図)をまとめたものである。ここでは南より①号塚、②号塚、③号塚とする。ここには方形で一边が約8~9m、高さが1~1.5mである。

今回の調査成果と比較すると、1号塚が①号塚、

塚	平面形	平面規模	高さ	距離
1号塚	隅丸長方形	東西10.5m、南北4.0m	0.68m	11.5m
2号塚	隅丸方形か円形	東西9.0m、南北7.1m	0.64m	

第13表 塚の規模

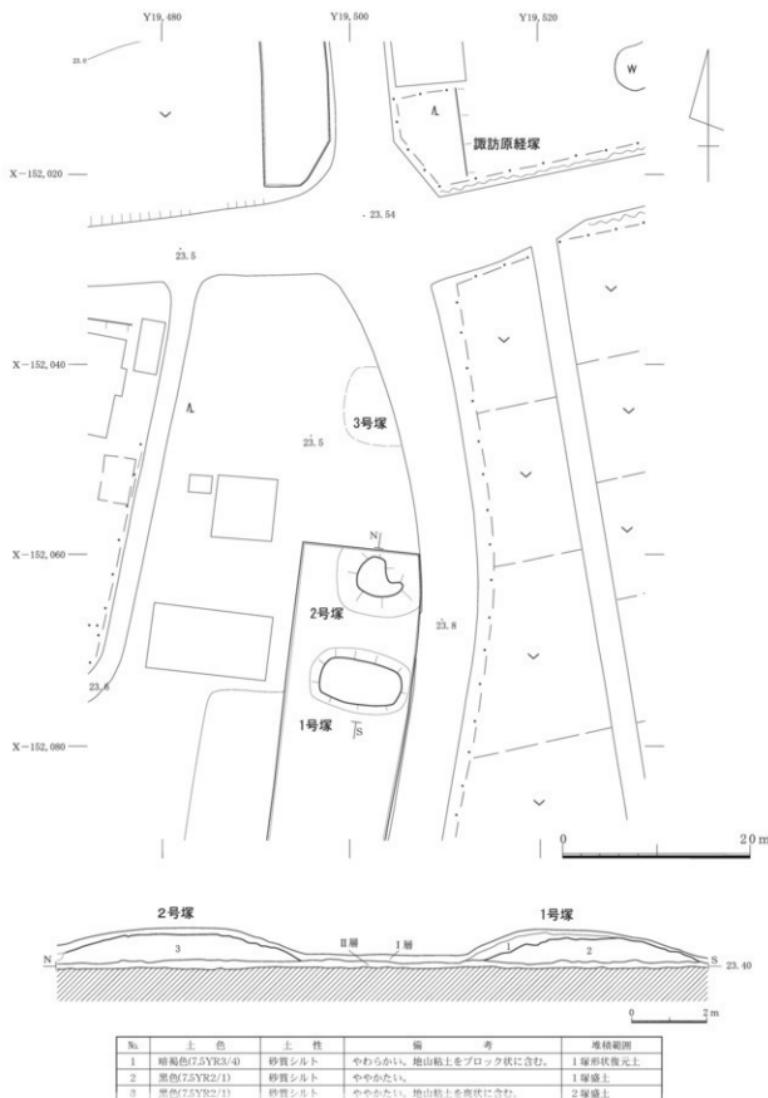
塚	平面規模	高さ	距離	現況
①号塚	8m×8m	1m	1~2号塚間、12.5m、	1号塚
②号塚	8m×8m	1m	2~3号塚間、17.3m、	2号塚
③号塚	9m×9m	1.5m	諏訪原経塚まで24m、	削平

第14表 『瀬峰町史』所載の四ツ塚の規模



第34図 『瀬峰町史』所載の四ツ塚

IV. 四ツ塚遺跡



第35図 1・2号塚

2号塚が②号塚、削平された塚が③号塚に該当すると考えられるが、平面規模に違いがある。下端の認識が異なる可能性もあるが、削平を受けたためと考えられる。

塚の構築年代は遺物が出土していないため不明である。北側に位置する諏訪原経塚(註7)は一边6m、高さ1m弱の方形であり、上部には虎渓寺六世の家山和尚により建立された元文5年(1740)銘の「南無妙法蓮華經千部一字一石一部供養碑」がある。平面形は四ツ塚と類似しているので、これらが同時期か近接した時期に構築された可能性もある。しかし、諏訪原経塚の詳細な状況を確認していない現在、単純に平面形の類似をもって同時期に構築されたとするのはできない。このことから四ツ塚の構築時期の詳細は不明である。

性格については『藤里村誌』上巻では「昔長崎四郎が築いた旗塚」、『瀬峰町史』では「文治五年(1189)奥州合戦の際に構築されたもの」と記述されているが、調査では性格を推定できる資料を得ることはできなかった。このことから四ツ塚の性格は明確には断言できない。仮に江戸時代に構築されたものであるならば田尻道沿いに設置された何らかの標遺構(註8)の可能性があり、この道路沿いにある諏訪原経塚、四ツ塚を含め検討を加える必要がある(註9)。

#### 4.まとめ

- (1) 四ツ塚遺跡は標高約20m前後の低丘陵頂上部から南側斜面に位置している。
- (2) 土坑を2基検出した。遺構からは遺物の出土がなく詳細な時期は不明であるが、遺構の形態や堆積土の状況から縄文時代の落とし穴遺構と考えている。縄文時代の遺構は遺跡内では從来知られておらず、新たな知見を加えることとなった。
- (3) 塚は盛土を持つことを確認したが、構築時期や性格の詳細は不明である。

註1 佐藤・阿部・赤沢1982「昭和59年度瀬峰町文化財バトロール事業報告」『瀬峰町の文化財』第4集、1-13頁。

註2 調査記録の中で、調査期間、詳細な調査区の位置、4号土坑の位置、塚の平面図を確認することができない。調査日は平成4年1月11日、平成4年6月16日などを確認している。第35図で示した塚の平面図は昭和61年度文化財バトロールで作成した略測図を修正して作成した。

註3 今村啓爾1994「臨(おとし穴)」『縄文時代の研究』2雄山閣、143~160頁。

註4 瀬峰町史編纂委員会1966「第7章 史跡・名所旧跡・金石文」『瀬峰町史(全)』、384-386頁。

註5 瀬峰町文化財保護委員会1971「瀬峰の史跡と伝承」、2頁では北側の1基(3号塚)は失われているとの記載がある。

註6 鈴木玄徳1922「名所舊蹟」『栄原郡藤里村誌』上巻、255頁。

註7 佐々木・阿部・赤沢・佐藤1987「瀬峰町内にある板碑・石碑等調査報告(6)」『瀬峰町の文化財』第6集、34頁。

註8 唐沢至朗1990「塚」『歴史考古学の問題点』、近藤出版社、350-356頁。唐沢至朗2003『民衆宗教遺跡の研究』高志書院。

註9 註6の文献では四ツ塚の説明に統けて、牛塚にも4つの塚があるが縁起は不明である。この塚の詳細な位置は確認できないのではあるが、牛塚の南側にある「本寺」には虎渓寺の家山和尚の弟子萬英により延享4年(1747)に建立された「奉説語大乗妙法蓮華經千部供養塔」(瀬峰町教育委員会2004『下富前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第23集)があり、虎渓寺がかかわっている。この碑と諏訪原経塚の建立年代は近接し、7年の間隔しかない。このことは江戸時代中期に栄原郡中村において虎渓寺が果たした役割を検討する上で大変重要な資料であり、当時の社会状況や村落構造も含め検討を進めめる必要もあると考えている。



## 写 真 図 版

図版 1 ~ 4 : 四ツ塙遺跡

図版 5 ~ 7 : 寺浦遺跡

図版 8 ~ 9 : 四ツ塙遺跡





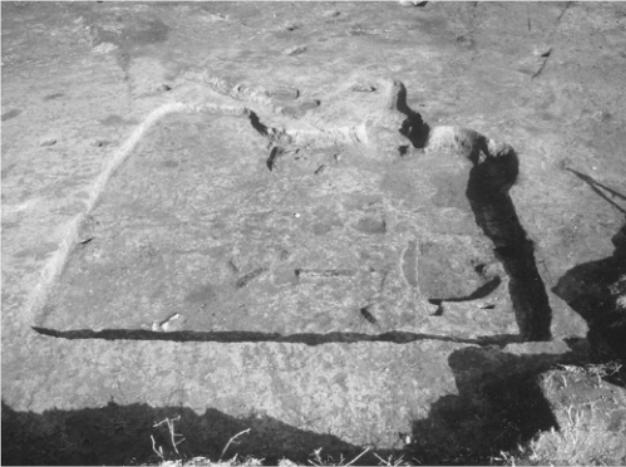
調査区近景（南西より）



1号住居跡（西より）



1号住居跡掘り方除去  
状況（西より）



2号住跡（南より）



2号住跡カマド  
(南西より)



2号住跡床面紡錘車  
出土状況（西より）



5号住居跡（西より）



5号住居跡カマド  
(南西より)



5号住居跡炭化物層上面  
土師器環出土状況  
(北より)



土師器壺 (2住カマド, R006)



土製品紡錘車 (2住床面, R005)



須恵器壺 (2住上層, R007)



土師器高台杯 (2住付近表土, R004)



陶製品 (2住床面, R052)



陶製品 (2住堆積土, R051)



土師器壺 (5住カマド前面, R025)



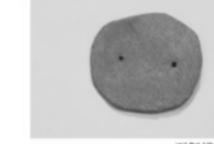
土師器壺 (5住炭化物上面, R001)



土師器壺 (5住炭化物上面, R002)



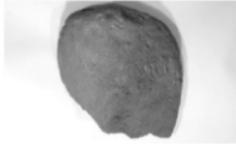
砥石 (5住堆積土, R044)



石製模造品 (5住堆積土, R045)



石製模造品 (5住堆積土, R046)



砥石 (5住カマド天井部構築土, R042)



砥石 (5住堆積土, R043)

図版4 四ツ壇遺跡出土遺物





2・3号建物跡（西より）



4号建物跡（南より）



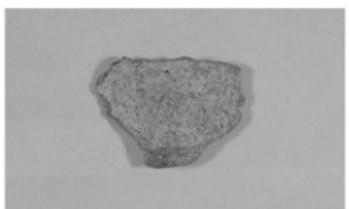
5号建物跡（南より）



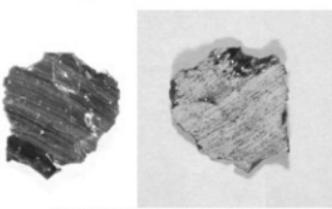
土師器壺（1住床面、R001）



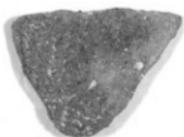
土師器壺（1住周溝直上、R002）



土師器壺か壺（1住掘り方、R003）



黒縞石製剝片（1住掘り方、R007）



弥生土器（5建P3柱痕跡、R006）

図版7 寺浦遺跡出土遺物



調査前の四ツ塚（北より）



四ツ塚調査区（南西より）



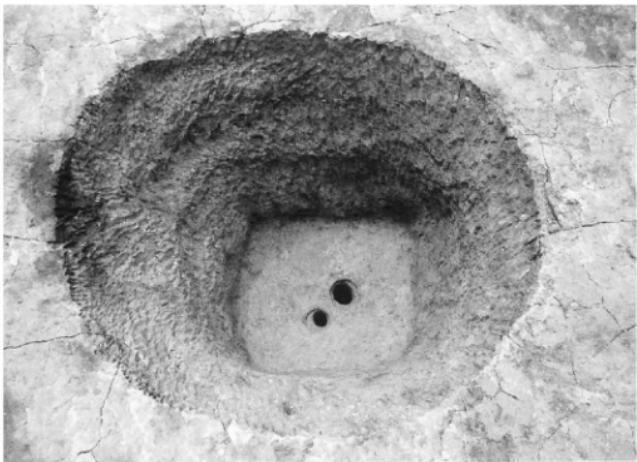
1号塚断面（西より）



2号塚断面（西より）



3号土坑（北より）



4号土坑（北西より）

# 報告書抄録

ふりがな	よつだんいせきほか						
書名	四ツ壇遺跡ほか						
副書名							
卷次							
シリーズ名	栗原市文化財調査報告書第3集						
編著者名	安達訓仁						
編集機関	栗原市教育委員会						
所在地	〒987-2215 宮城県栗原市築館高田2-10 TEL 0228-23-2228 FAX 0228-23-2231						
発行年月日	平成18年3月27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
よつだんいせき 四ツ壇遺跡	栗原市瀬峰窪 わはら 訪原66~69	045268	46004 38° 38' 13"	141° 3' 17"	20031223、 25~ 20040110、 0127	600m <sup>2</sup>	堆肥舎
てらうら 寺浦遺跡	栗原市瀬峰寺 うら 浦98	045268	46053 38° 39' 28"	141° 2' 21"	20040705~ 15	210m <sup>2</sup>	堆肥舎
よづかいせき 四ツ塚遺跡	栗原市瀬峰四 だはる ツ壇原地内	045268	46002 38° 37' 53"	141° 3' 13"	19920111、 0616	3,920m <sup>2</sup> (対象面積)	県道田尻瀬峰線改 良工事及び県道拡 幅に伴うビニール ハウス移転工事
遺跡名	性格	時期	検出遺構	出土遺物			備考
四ツ壇遺跡	散布地 塚	古代	竪穴住居跡 3棟 土坑 4基 溝跡 1条	土師器、須恵器、鋳鍊車、石 製模造品、陶製品、石製品			
寺浦遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 1棟 建物跡 4棟	弥生土器、土師器、須恵器、 黒曜石製剝片			
四ツ塚遺跡	塚 散布地	縄文時代 平安時代?	落とし穴遺構 2基 塚 2基	なし			

(北緯、東経は世界測地系による)

## 栗原市文化財調査報告書 第3集

### 四ツ壇遺跡ほか

印刷 平成18年3月23日

発行 平成18年3月27日

発行 栗原市教育委員会

〒987-2215 宮城県栗原市築館高田2-10  
TEL 0228-23-2228 FAX 0228-23-2231

印刷 株式会社小野寺印刷所

〒987-2216 宮城県栗原市築館伊豆1丁目17-3  
TEL 0228-22-3206 FAX 0228-22-3209